# 史跡斎宮跡

平成20年度発掘調査概報

2010年3月

斎 宮 歴 史 博 物 館



第157次調査区全景(東から)



第158次調査区 古代伊勢道(東から)

平成21年度は、斎宮跡の発掘調査が始まってから、ちょうど40年目を迎え、また、 斎宮跡が国史跡に指定されて30年目になります。こうした節目の年に、斎宮跡から 出土した遺物2.661点が重要文化財に指定され、大きな注目を集めました。

史跡の調査では、平成19年度より行ってきました柳原地区での調査が3年目を迎え、平安時代の斎宮跡中枢部の実態が明らかになりつつあります。今回報告いたします平成20年度の調査では、柳原区画の北西部や南東部を調査し、区画隅部分の建物の配置や変遷などを確認したほか、隣接する御館地区では古代伊勢道や方格地割の区画道路を、史跡北東部の東加座地区では区画道路の交差点部分を確認しました。

今後、こうした発掘調査で得た成果を、地元明和町をはじめ、県民や斎宮跡を訪れてくれる方々に還元するとともに、積極的な情報発信に活かしていきたいと考えております。また、多くの方々に史跡を親しんで頂けるよう、史跡整備にも反映していきたいと思います。

史跡斎宮跡の保存および調査研究・整備活用にあたり、貴重なご意見やご指導を頂きました文化庁、斎宮跡調査研究指導委員他多くの方々、並びに発掘調査にあたり、様々なご配慮・ご協力を頂きました地元明和町および国史跡斎宮跡協議会をはじめ地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

2010 (平成22) 年3月

斎宮歴史博物館

館 長 瀧 上 昭 憲

## 例 言

- 1 本書は、斎宮歴史博物館が平成20年度に国庫補助金を受けて実施した史跡斎宮跡発掘 調査(第157·158·160次調査)の概要をまとめたものである。第159次調査については、 平成21年度も継続して調査を行ったため、次年度の概報にて報告を行う。
- 2 明和町が、国庫補助金の交付を受け、調査主体となって実施した史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の第161次調査報告書は、別途明和町が刊行している。
- 3 遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法(旧国土座標)の第Ⅵ座標系を基準とし、方位は旧国土座標による座標北で示している。また、建物の軸方位については、全て北を規準として表記している。
- 4 遺構時期区分の指標となる土器の分類と時期認定については、「斎宮跡の土器」(『斎宮跡発掘調査報告 I 』斎宮歴史博物館、2001年)による。
- 5 遺構表示記号は次のとおりである。
  - SB:掘立柱建物 SD:溝 SF:道路 SK:土坑 pit:柱穴
- 6 遺物実測図は基本的に実物の4分の1で行っているが、一部の遺物は2分の1で掲載 している。遺物写真は縮尺不同である。
- 7 土層および出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』(2004年度版)に拠る。施釉陶器の色調については一部、大日本インキ化学工業株式会社発行 『日本の伝統色』第5版(1989年)を用いて補っている。
- 8 遺物の漢字表現については、材質の差による漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「椀」、「つき」は「杯」を用いている。ただし、参考文献などからの引用の場合にはこの限りではない。
- 9 本書の執筆は、倉田直純・新名強・角正芳浩があたり、文末に記した。編集は調査研究課で行った。また、発掘調査および資料整理については、大川勝宏・西村秋子・杉原泰子・八木光代・水木夏美・大橋由紀・山本達也が補佐した。
- 10 金属製品の分析および保存処理にあたっては、(財)元興寺文化財研究所に委託した。
- 11 本概報を作成するにあたって、下記の方々のご教示を得た。謹んで御礼申し上げます。(50音順・敬称略)

青木敬・豊島直博・中川あや・降旗順子・松村恵司・弓場紀知

## 目 次

1	刖 言			1
II	第157岁	大調査		7
$\blacksquare$	第158次	大調査 · · · · ·		37
V	保仔処	埋		65
			挿 図 目 次	
第 [ -	- 1 図	中跡斎宮跡位	置図	3
	- 2図		掘調査区位置図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
	- 3 図		割区画名称図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	- 4 図		おける大地区表示図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
	- 1 図		次調査 調査区位置図	
	- 2図		遺構図	
	- 3図		次調査 大地区・グリッド図 ······	11
	- 4 図	第157次調査	土層断面図 (1)	12
第Ⅱ-	- 5図	第157次調査	土層断面図 (2)	13
第Ⅱ-	- 6図	第157次調査	S B 9900平面·横断面図	14
第Ⅱ-	- 7 図	第157次調査	S B 9910平面·横断面図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	15
第Ⅱ-	- 8図	第157次調査	S B 9920平面·横断面図 ······	15
第Ⅱ-	- 9図	第157次調査	S K 9940平面·立面図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	16
第Ⅱ-	- 10図	第157次調査	S K 9941平面・断面図	16
第Ⅱ-	- 11図	第157次調査	S B 9879 (u14p1) 平面・立面図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	16
第Ⅱ-	- 12図	第157次調査	S B 9875 (v13p9) 平面・立面図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	16
第Ⅱ-	- 13図	第157次調査	遺物実測図(1)	21
第Ⅱ-	- 14図	第157次調査	遺物実測図(2)	
第Ⅱ-	- 15図	第157次調査	遺物実測図(3)	
第Ⅲ-	- 1 図	第158次調査	第158・28・55次調査遺構図	
	- 2図	第158次調査	S D 10001 · 10002西壁土層断面図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	39
第Ⅲ-	- 3図			38
	- 4 図	第158次調査	S B 9951 (ℓ 23p5) 平面·立面図 ··································	39
	- 5図	第158次調査	S B 9950 (m25p7) 平面・立面図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	36
	- 6図	第158次調査	土層断面図	40
	- 7図	第158次調査	遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	45
	- 1 図	第160次調査	調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	51
	- 2図	第160次調査	大地区・グリッド図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	52
	- 3図	第160次調査	第160·79次調査遺構図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	53
	- 4図	第160次調査	土層断面図	54
	- 5 図	第160次調査	S B 10030平面・横断面図	55
	- 6図	第160次調査	S D 4355 · 10020東壁土層断面図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	55 55
	- 7図	第160次調査		55 57
护IV ·	- 8図	第160次調査	遺物実測凶	57

第V-1		67
第V-2	図 保存処理 分析箇所bのXRFスペクトル ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	ô7
第V-3	図 保存処理 分析箇所 c の X R F スペクトル ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	68
第 V - 4	図 保存処理 分析箇所 d の X R F スペクトル ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	68
	写 真 図 版 目 次	
巻頭	第157次調査区全景(東から)/第158次調査区 古代伊勢道(東から)	
正 I – 1		29
II - 2		30
II - 3		31
II - 4		32
II - 5		33
		34
II - 6		
II - 7	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	35
II - 8	W101/03/W (2)	36
<b>I</b> − 1		47
III - 2		48
Ш − 3		49
III - 4		50
IV - 1		61
$\mathbb{N}-2$		62
IN - 3		63
$\mathbb{N}-4$		64
V - 1	第157次調査出土金属製品 分析位置 6	
V - 2		65
$\Lambda - 3$	分析箇所 d (金色部分)拡大写真     · · · · · · · · · · · · · · · · ·	65
	主 口 炉	
	表目次	
第 I - 1	表 平成20年度 発掘調査一覧表	2
第Ⅱ-1	表 第157次調査 掘立柱建物一覧表	17
第Ⅱ-2	表 第157次調査 遺構一覧表 (1)]	18
第Ⅱ-3	表 第157次調査 遺構一覧表 (2)]	19
第Ⅱ-4		24
第Ⅱ-5		25
第Ⅱ-6		26
第Ⅲ-1		42
第Ⅲ - 2		 42
第Ⅲ-3		43
第Ⅲ - 4		46
第Ⅳ-1		56
第11 - 2		56
第IV - 3	20 3/1 2000 V/V	58
第 V - 1	表 第160次調査 検出元素一覧表	66

## I 前 言

#### 1 調査の経緯と概要

史跡斎宮跡は、後に斎宮歴史博物館が建設された 古里地区での宅地開発計画に伴い昭和45年に発掘調 査が始まり、文化庁の補助事業として昭和48年から 開始した範囲確認調査を経て、昭和54年3月27日に 国史跡に指定された。県は史跡指定に伴い斎宮跡調 査事務所を設置して発掘調査に当たり、平成元年度 からは10月に開館した斎宮歴史博物館が史跡解明の ための計画調査を継続して実施している。

斎宮跡の発掘調査は、これまでの調査成果の蓄積から、史跡東部に存在した平安時代の斎宮跡解明が中心となって進められてきたが、史跡西部に所在すると想定されてきた飛鳥・奈良時代の斎宮跡を解明することも重要な課題として残っているほか、鎌倉時代以降の実態についても解明しなければならない課題として残っている。

一方、史跡整備については平成15年度以降中断しており、地元からも史跡東部の整備を望む声が高まってきたことから、平成18年度に史跡整備の在り方検討会を開催し、柳原区画を中心とした史跡東部における整備の方向が示された。そして、その実現に向けての当面の課題として当該地区における実態解明と土地の公有化が急務とされた。

#### 発掘調査

上記の課題を受け、平成19年度から3ヵ年計画で中院想定地とも目されている柳原区画の実態解明を重点的に進めることとなった。第2年次にあたる平成20年度は、柳原区画で約1,000㎡、隣接する御館区画で1,280㎡の確認調査を行うとともに、東加座区画で約600㎡の調査を実施することとなった。

柳原区画では、これまでに第8-9·10次調査(範囲確認トレンチ調査)、第10次調査(広域圏道路)、第20次調査、第28次調査、第143次調査、第152次調査、第153次調査が実施され、古代伊勢道(奈良古道)や区画道路のほか、区画の中央部から南部にかけて庇をもつ大型の掘立柱建物が複数棟確認されて

いる。特に中央部で確認された四面庇付建物は、ほぼ同一場所で少なくとも5回建替えられたことが判明しており、当該区画の性格を明らかにするうえでキーポイントになると考えられている。今回は、その北側にあたる区画北西部と南東部の遺構状況を確認するため、第157次調査と第159次調査を行うとともに、隣接する御館地区でも南北方向の区画道の状況を確認するため第158次調査を行った。また、史跡北東部の東加座北区画北辺部で、南北方向の区画道と東西方向の区画道との取り付き状況を確認するため、第160次調査を実施した。

#### 整備

史跡東部の整備に向けて、調査研究指導委員会の 課題別部会として設置した学識経験者・地元住民等 8名の委員から成る斎宮跡整備・活用検討会におい て、柳原区画の調査と併行して、整備・活用に関す る基本的な骨子案について検討を行った。

#### 発掘調査現場の公開・活用

昨年度から発掘調査現場の積極的な利活用を目標として、見学者への随時説明、発掘進捗状況のホームページ上での情報発信に努めるとともに、従来から行ってきた現地説明会、夏休み子ども体験発掘教室、学校団体の遠足等での体験発掘など、さまざまな取り組みを行ってきたが、本年度はこれらに加えて新たに発掘体験ウィークを設け、大人向けの発掘体験実習講座も開催した。その結果、昨年度より10%増の1.832人の方に遺跡に触れていただいた。

#### 2 調査体制

史跡斎宮跡の調査・整備に関する業務は、斎宮歴 史博物館調査研究課が担当した。当報告に関わる組 織は以下の体制で行った。

平成20年度

倉田直純(専門監兼課長)

大川勝宏 (主幹)

新名 強(技師)

角正芳裕(技師)

山本達也(臨時技術補助員)

平成21年度

倉田直純 (専門監兼課長)

大川勝宏 (主幹)

新名 強(技師)

角正芳浩 (技師)

山本達也(臨時業務補助職員)

#### 3 調査研究指導委員会

斎宮跡の調査・整備について指導・助言を得るため、平成20年9月4日、平成20年12月1日の2回、委員会を開催し、第157次・158次調査と今後の整備について指導を得た。指導委員の方々は下記のとおりである。(順不同・敬称略)

上村喜久子(元名古屋短期大学教授)

浅野 聡 (三重大学准教授)

佐々木恵介(聖心女子大学教授)

鈴木嘉吉 (元奈良国立文化財研究所長)

所 京子(岐阜聖徳学園大学名誉教授)

八賀 晋(三重大学名誉教授)

町田 章(前奈良文化財研究所長)

渡辺 寛(皇學館大学教授)

金田章裕(人間文化研究機構機構長)

増渕 徹(京都橋大学教授)

#### 4 斎宮跡整備・活用検討会

史跡東部の整備・活用に関し、指導・助言を得るため、平成20年10月16日、平成21年3月5日の2回、検討会を開催し、柳原区画を中心とする史跡東部整備基本計画策定に向けた骨子案の検討を行ったほか、整備上の課題、新しい整備に求められる機能、空間の演出と活用、住民との協働等について意見や助言をいただいた。検討委員の方々は下記のとおりである。(順不同・敬称略)

増渕 徹 (京都橘大学教授)

浅野 聡 (三重大学准教授)

平澤 毅 (奈良文化財研究所主任研究員)

島田敏男(奈良文化財研究所遺構研究室長)

千種清美 (フリーライター)

西村和浩 (第三銀行経済研究所長)

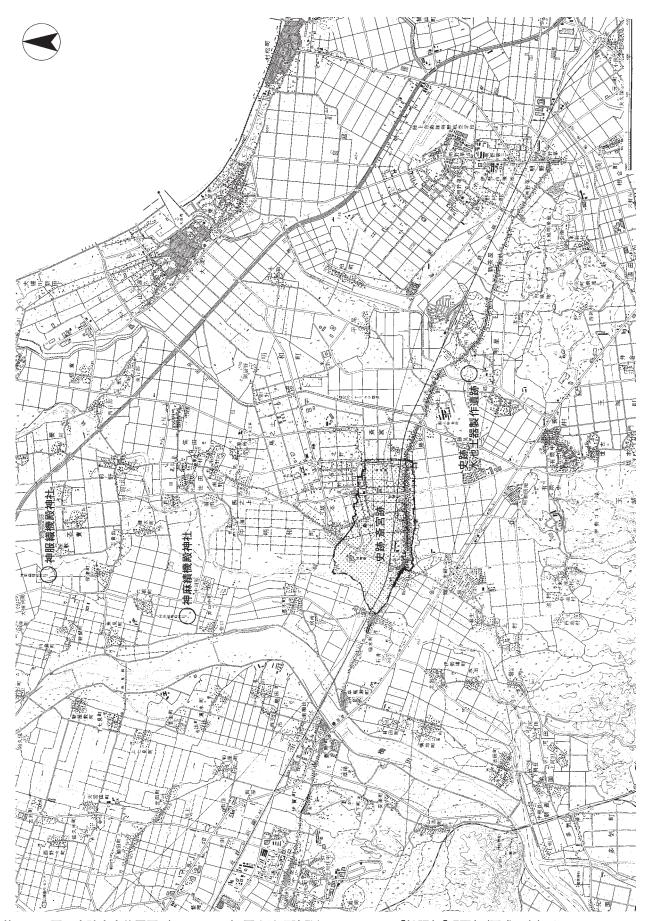
辻 孝雄(国史跡斎宮跡協議会会長)

作野かをる(斎宮ガイドボランティア会長)

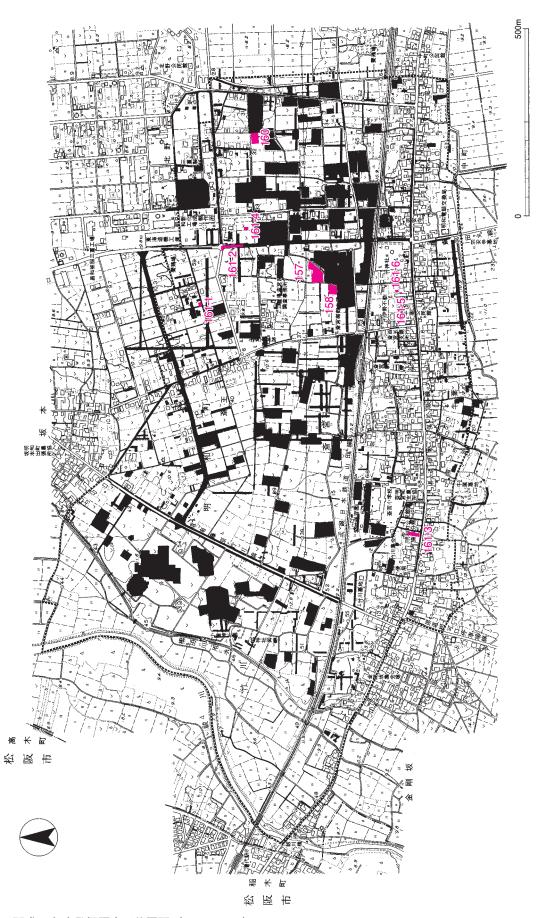
(倉田直純)

第 I - 1 表 平成20年度 発掘調査一覧表

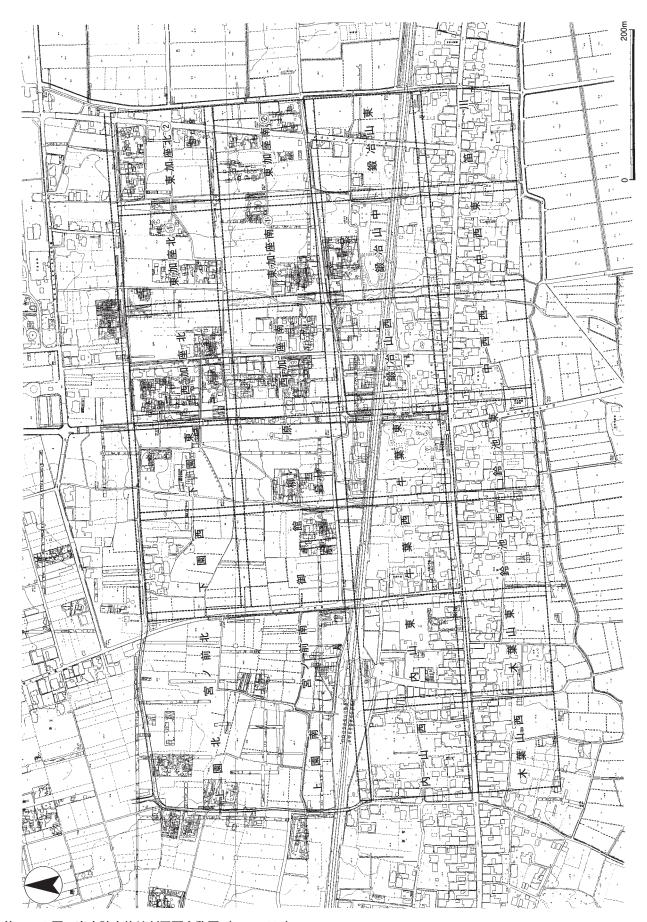
			•				
調査次数	地区	面積(㎡)	調査期間	位置	土地所有者	現状変更	保存地 区区分
157	Q10 · R10	1,280	20.5.26~11.24	明和町斎宮字柳原	個人・明和町	計画発掘調査	1
158	Q10·Q11	525	20.8.18~12.27	明和町斎宮字御館	個人・明和町	計画発掘調査	1
159(北)	R10 · R11	488	20.9.22~21.3.31	明和町斎宮字西加座	個人	計画発掘調査	1
160	U8	602	20.7.18~21.2.27	明和町斎宮字東加座	明和町	計画発掘調査	1
161 – 1	Q7	46	20.9.8~9.17	明和町斎宮字楽殿	個人	個人住宅新築	3
161 – 2	R7~R11	87.4	20.10.15~21.2.4	明和町斎宮字楽殿 · 西前沖 · 西加座	個人・明和町	下水道管敷設	1.2.3
161 – 3	K13	19.6	20.11.18~11.26	明和町竹川字東裏	個人	個人住宅建替	4
161 – 4	S8	72.5	20.12.9~12.19	明和町斎宮字西前沖	個人	個人住宅新築	2
161-5	Q12	5.8	20.12.2	明和町斎宮字牛葉	個人	個人住宅改築	4
161 – 6	Q12	6	21.1.27~1.29	明和町斎宮字牛葉	個人	農業用倉庫新設	3.4



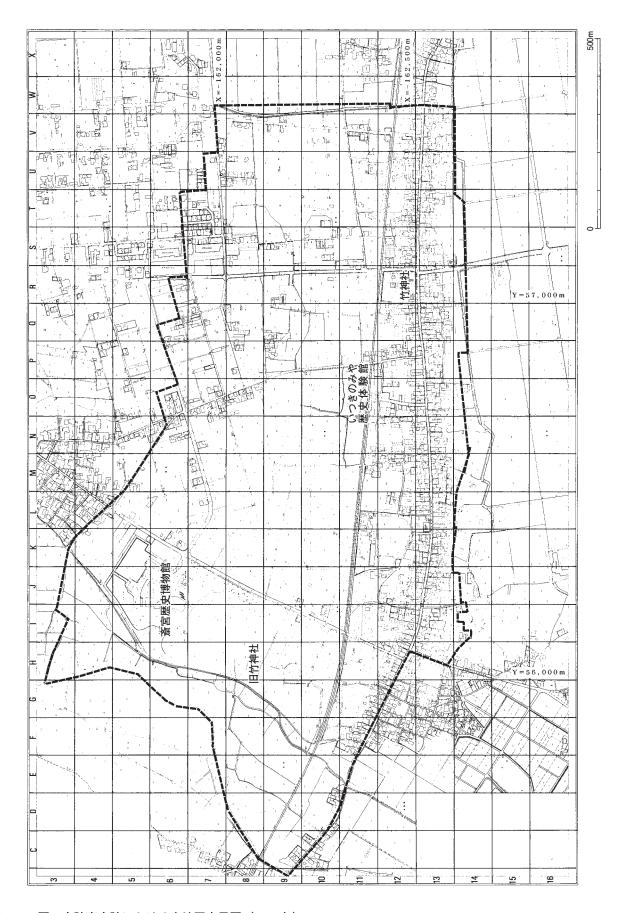
第 I - 1 図 史跡斎宮位置図 (1:50,000) 国土地理院発行 1/25,000「松阪」「明野」(平成4年)より



第 I - 2 図 平成20年度発掘調査区位置図 (1:10,000)



第 I - 3 図 斎宮跡方格地割区画名称図(1:5,000)



第 I - 4 図 史跡斎宮跡における大地区表示図(2002年)

## Ⅱ 第157次調査

(6AQ10·R10 柳原地区)

#### 1 はじめに

第157次調査区は、史跡東部に位置する方格地割の中央部、柳原区画に位置している。当該区画は、「内院」推定地である牛葉東区画の北隣に位置し、方格地割のほぼ中心に位置することから、斎宮跡の中でも重要な部分と考えられている。平成19年度に実施された第152次調査では、区画中央部で複数回の建て替えが行われた四面庇付建物を確認しており、第153次調査でも大型の三面庇付建物を確認するなど、柳原区画が斎宮跡において重要な部分であることが判明している。第157次調査区は、柳原区画の北西隅部に位置する。今回の調査では、柳原区画の建物の変遷や区画内の空間利用の実態解明を目的として、平成20年5月26日から平成20年11月24日まで実施した。調査面積は1,280㎡である。

#### 2 地形と層位

第157次調査を実施した柳原地区は、史跡の保存管理区分の第一種保存地区に属し、史跡整備を前提とした土地公有地化が進められている。調査区は標高9.9~10.3m程度の平坦地であるが、北へ向かって緩やかに傾斜する。調査区北側は低地となっており、東側から西側に向けて浅い谷が入り込んでいる。

基本層位は、灰黄褐色砂質土の表土下に黒褐色や暗褐色砂質土が堆積しており、表土下0.2~0.3mほどで灰白色粘土の地山面を確認した。また、調査区北東部は、土取りによる削平が広範囲で認められたため、調査区中央北部にトレンチを設定して土層を確認した。

### 3 遺構

この調査では、掘立柱建物16棟および溝31条、土坑21基を確認した。調査区の北東部では近世以降の土取りのため、遺構は一部で柱穴や土坑が確認されたものの、大部分で削平を受けていた。方格地割の区画道路南側溝についても、調査区北東部で確認で

きる予定であったが、削平されており、遺構は確認 できなかった。

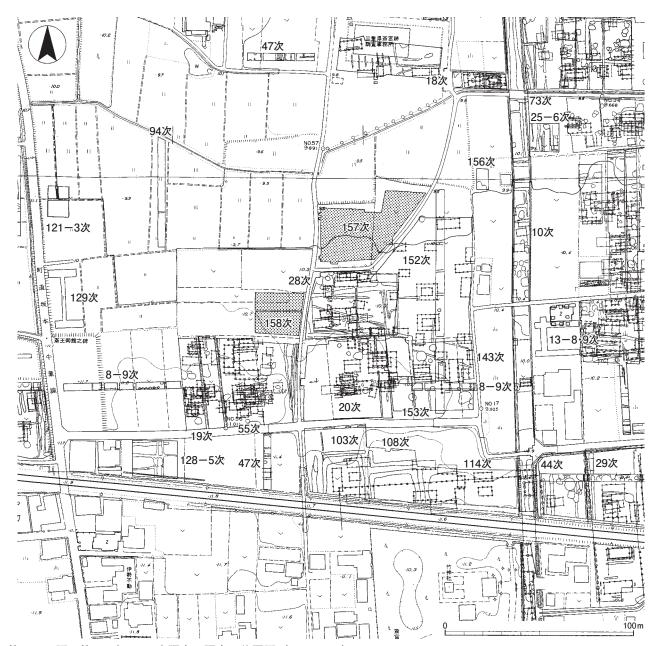
#### (1) 斎宮 I - 4期の遺構

S B 9883 調査区南西部で確認した南北棟の掘立柱建物で、柱掘形の棟方位は、東側柱列でN 0°S、西側柱列でN 4°W、北側柱列でN 5°Wと振れが大きい。柱掘形は一辺0.5m前後の方形を呈しており、柱間は $1.5 \sim 1.6$ mと狭い。S B 9883の中心には、S K 9941が存在することから、S B 9883はこの土坑を囲む簡易な建物であった可能性も考えられる。重複関係よりS B 9900に先行すると判断される。

SB 9900 調査区南西部に位置する掘立柱建物で、桁行 4 間以上×梁行 2 間の南北棟である。棟方位はN  $3^{\circ}$ Wで、柱間は桁行・梁行とも2.4mを測る。柱掘形は一辺 $0.7 \sim 1.1$ mの方形もしくは長方形を呈する大型のもので、柱痕跡は直径 $0.2 \sim 0.4$ mである。 4 基の柱掘形には、建物内側の隅部分に長径 $0.4 \sim 0.6$ m×短径0.2m程度の細長い小ピットが確認でき、床束に伴う遺構である可能性も考えられるが、柱掘形の南側や北側に存在するなど位置が揃っていないことや東西で対応する柱掘形で確認できなかったことから、積極的に床束であるとは判断できなかった。柱掘形から土師器杯(10)・皿(11)が出土しており、1-4期の遺構と考えられる。

SB9910 調査区北西部に位置する掘立柱建物で、桁行5間×梁行2間の東西棟である。棟方向はN4°Wで、柱間は桁行2.3m、梁行2.0mを測る。柱掘形は一辺0.6~0.8mの方形もしくは長方形を呈し、柱痕跡は0.2m程度である。4箇所の柱掘形で柱抜き取り痕を確認している。重複関係より、SK9930に先行する。

SB9873 調査区中央北端部に位置する掘立柱建物で、桁行3間×梁行2間の東西棟である。棟方位はN4°Wで、柱間は桁行2.0m、梁行1.8mを測る。ただし、南東隅に位置する柱掘形は、他のものと規模や柱筋がやや異なる。柱掘形より土師器の小片が出土したのみで、遺物からは時期決定できなかった



第Ⅱ-1図 第157次・158次調査 調査区位置図 (1:2,000)

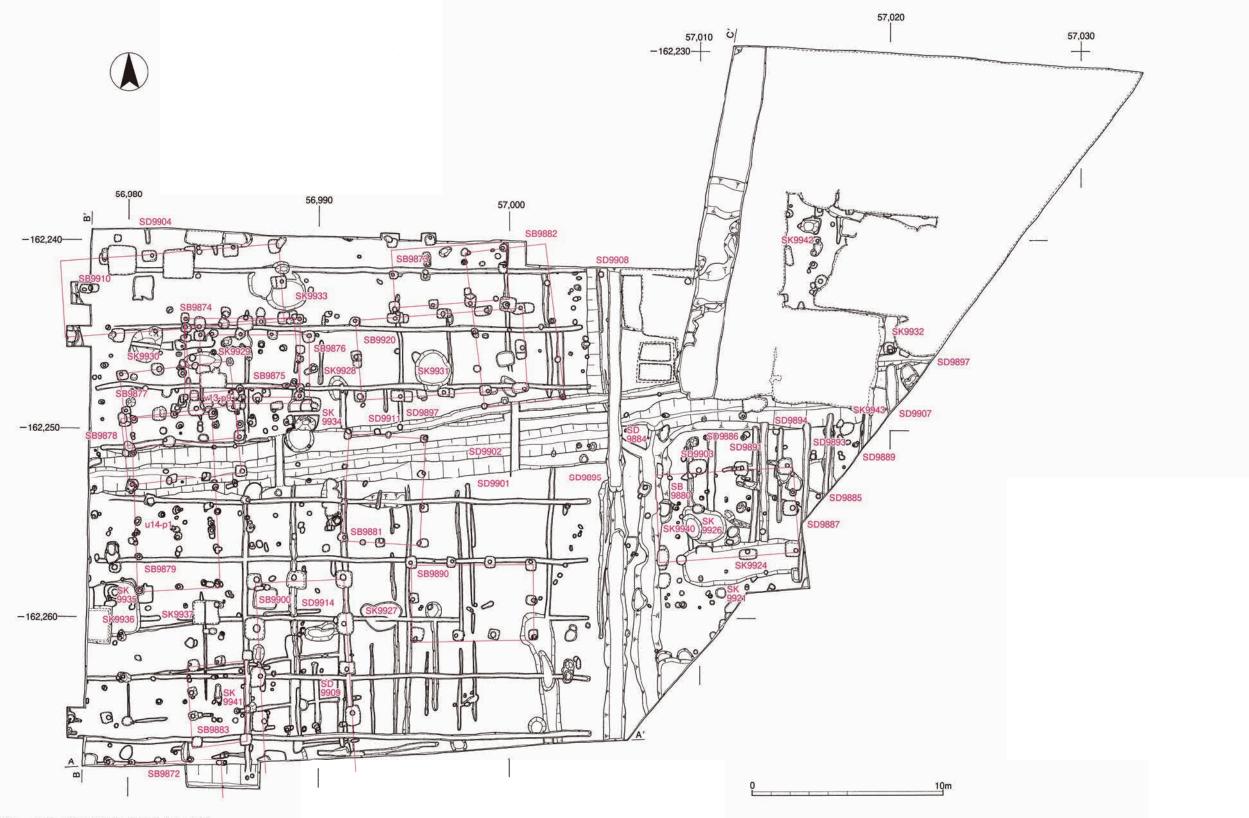
が、SB9910と南側の側柱通りをほぼ揃えて建てられていることから、並存していたものと考えられる。 SB9880 調査区中央東端部に位置する掘立柱建物で、桁行3間×梁行2間の東西棟である。棟方位はN3°Wで、柱間は桁行2.4m、梁行2.3mを測る。 柱掘形は一辺 $0.7\sim1$  mの方形もしくは長方形を呈し、柱痕跡は $0.2\sim0.3$ mである。建物の南面とSB9900の北面がほぼ揃い、建物の西面同士の間隔が70小尺(1小尺=約29.6cm)である。

**S K 9931** 調査区中央北部に位置する土坑で、直径1.9mの楕円形を呈し、深さは0.4m。土師器杯(1~3)・椀(5)・皿( $6\cdot7$ )・甕( $8\cdot9$ )、黒色

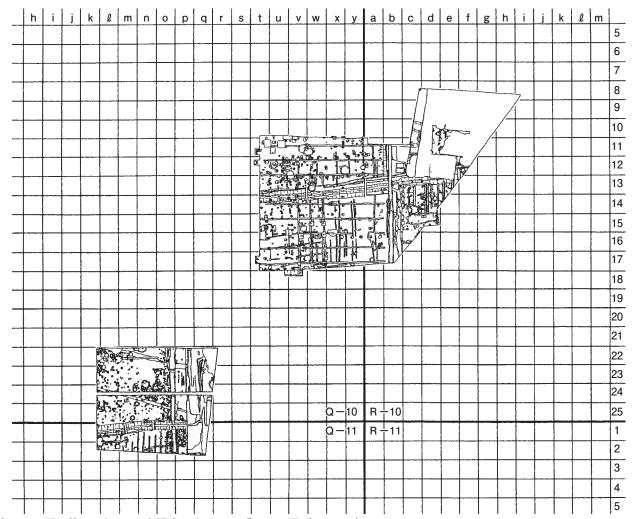
土器椀(4)が出土しており、I-4期と考えられる。 **S K 9941** 調査区南西部に位置する土坑で、長径  $1 \text{ m} \times 220.35 \text{ m}$ の細長い楕円形を呈する。深さは  $0.07 \sim 0.1 \text{ m}$ で中央部がやや深くなり、南部は浅い。底面の北半から東半部が火を受けて赤変しており、遺構埋土には焼土片や炭片が混じっていることから、小規模な炉跡の可能性が考えられる。前述した S B 9883に伴う遺構である可能性が高く、I-4期の遺構と考えられる。

#### (2) 斎宮Ⅱ-1~2期の遺構

S B 9881 調査区中央部に位置する掘立柱建物で、桁行3間×梁行2間の南北棟である。棟方位はN



第Ⅱ-2図 第157次調査 遺構図 (1:200)



第 Ⅱ - 3 図 第157次・158次調査 大地区・グリッド図 (1:800)

3° Eで、柱間は桁行1.8m、梁行2.0mを測る。柱 掘形から土師器杯・甕、須恵器が出土しており、Ⅱ -2期のものと考えられる。

**SB9890** 調査区中央南部に位置する掘立柱建物で、桁行3間×梁行2間の東西棟である。棟方位はN0°で、柱間は桁行2.1m、梁行2.0mを測る。柱掘形は一辺0.5~0.7mの方形を呈し、柱痕跡は直径0.2~0.3mである。土師器杯・甕、須恵器杯が出土しており、 $\Pi-1$ ~2期のものと考えられる。

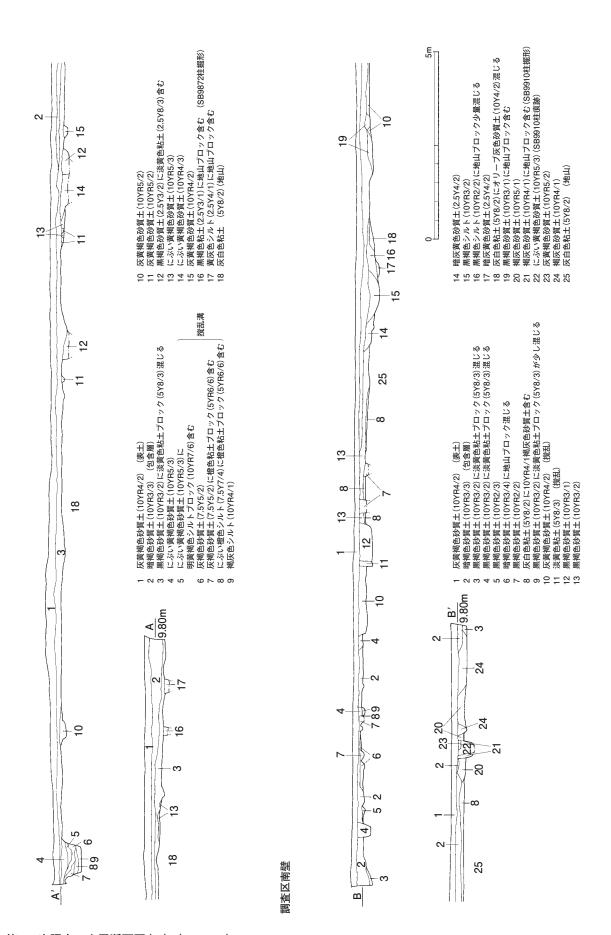
S D9907 調査区東辺中央部に位置する南北溝で、南側調査区外へ続く。幅0.6m・深さ0.15mを測り、溝方向はN3°Wである。土師器甕・高杯、須恵器甕、白色玉石(122)などが出土した。重複関係よりSD9897に先行する。出土遺物よりⅡ-1期に属するものと考えられる。

SK9934 調査区中央部に位置する土坑で、長径 2m×短径1.7mの隅丸方形を呈する。土師器杯(12 ~ 17)・椀 (18~21)・皿 (22~27)・鉢 (28~30)・鍋 (31)、須恵器杯蓋 (32)・杯 (33)・台付盤 (34) など、多数の土器が出土した。重複関係より S B 9876に先行し、出土遺物より II - 1~2 期に属するものと考えられる。

#### (3) 斎宮 Ⅱ-3~4期の遺構

**SB9874** 調査区北西部に位置する掘立柱建物で、SB9875・9876と重複する。桁行 3 間×梁行 2 間の東西棟で、棟方位はNO°。柱間は桁行1.9m、梁行2.1mを測る。柱掘形より、土師器杯・皿(78)・甕・竈、灰釉陶器などが出土しており、 $II-3\sim4$ 期のものと考えられる。

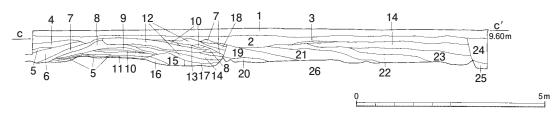
SB9876 調査区北西部に位置する掘立柱建物。 桁行3間×梁行2間の東西棟。棟方位はNO°で、 柱間は桁行1.9m、梁行1.8mを測る。重複関係より SB9910・SB9874・SK9934に後出し、SB9878 に先行する。柱掘形より土師器杯・皿・甕、土錘な



第Ⅱ-4図 第157次調査 土層断面図(1)(1:100)

調査区南壁

#### 調査区北西部西壁



- 暗褐色砂質土 (表土)
- 黒褐色砂質土 (7.5YR3/2) (包含層)
- 褐色砂質土(10YR4/6)
- 4
- 黒褐色砂質土(10YR2/2) 暗褐色砂質土(10YR3/4)
- 暗褐色砂質土(10YR3/3)に円礫多数混じる
- 褐色砂質土(10YR4/6)に明褐色砂質土ブロック(7.5YR5/8)混じる
- 黒褐色砂質土(10YR3/1) 8
- 黒色砂質土(10YR2/1)に明褐色砂質土ブロック(7.5YR5/8)少量混じる
- 10 黑色砂質土(10YR2/1)
- 黒色砂質土(10YR2/1)に暗褐色砂質土ブロック(10YR3/4)混じる
- 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) に明褐色砂質土ブロック (7.5YR5/8) 混じる
- 褐色砂質土(10YR4/6)に明褐色砂質土ブロック(7.5YR5/8)混じる
- 黒褐色砂質土(7.5YR3/1)

#### 第 Ⅱ - 5 図 第157次調査 土層断面図 (2) (1:100)

どが出土しており、Ⅱ-3期のものと考えられる。

SB9877 調査区北西部に位置し、SB9878と南 半部が重複する掘立柱建物。桁行3間×梁行2間の 東西棟で、棟方位はN7°W。柱間は桁行1.9m、梁 行2.0mを測る。柱掘形より土師器杯・皿 (76)・甕、 須恵器が出土しており、Ⅱ-3~4期のものと考え られる。

SB9878 SB9877と北半部が重複する掘立柱建 物で、桁行3間×梁行2間の東西棟。棟方位はN7 。Wで、柱間は1.9m、梁行1.8mを測る。柱痕跡よ り須恵器杯蓋(77)が、柱掘形より土師器杯・甕・甑、 須恵器甕、土錘などが出土しており、Ⅱ-3~4期 のものと考えられる。重複関係より、SB9877に後 出する。

SK9930 調査区北西部に位置する土坑で、長径 2 m×短径1.5mの楕円形を呈する。深さは0.5mで、 埋土は灰黄褐色および黒褐色砂質土である。重複 関係よりSB9910より後出する。土師器杯(35~ 37) ・ 椀 (38 · 39) ・ 皿 (40 ~ 45) ・ 甕 (46 · 47) ・ 鉢(48)、灰釉陶器段皿(49)、志摩式製塩土器(50 ~53) などが出土しており、Ⅱ-3期の良好な一 括資料である。

S K 9933 調査区北西部に位置する土坑で、長径 3.3m×短径2mの不定形を呈する。深さは0.15~0.2 mで、南側が一段深い。重複関係よりSB9910に後 出し、土師器杯 (54~62)・椀 (63~68)・皿 (69・ 70)·甕 ( $71 \sim 74$ )、灰釉陶器、志摩式製塩土器 (75)、 鞴羽口などが出土した。Ⅱ-3期のものである。

- 灰黄褐色砂質土(10YR5/2)に地山ブロック少量混じる
- 灰黄褐色砂質土(10YR5/2)に地山ブロック多く混じる 16
- 地山ブロックに灰黄褐色砂質土ブロック(10YR5/2)を含む
- 黑褐色砂質土(2.5Y3/1) 18
- 暗褐色砂質土(10YR3/3)に地山ブロック少量混じる 19
- 暗褐色砂質土 (10YR3/3) に地山ブロック多く混じる
- 黒褐色砂質土(10YR3/2)に褐色砂質土ブロック(10YR4/6)少量混じる暗褐色砂質土(10YR3/3)に褐色砂質土ブロック(10YR4/6)混じる
- 暗オリーブ灰色砂質土(2.5Y3/3)に黒褐色砂質土ブロック(10YR3/2)混じる 褐色砂質土(10YR4/4)に明赤褐色砂質土ブロック(5YR5/8)多く混じる
- 黑褐色砂質土(10YR4/5) (粘性有)
- 淡黄色粘土(10YR4/6) (地山)

SK9928 調査区中央北部に位置する土坑で、長 径1.2m×短径1mの楕円形を呈する。深さは0.1m で、土師器杯・皿・甕、灰釉陶器皿(79)が出土し た。出土遺物よりⅡ-3期に属すると考えられる。

#### (4) 斎宮Ⅱ-4~Ⅲ-1期の遺構

S B 9875 調査区北西部に位置する掘立柱建物 で、SB9874・9876と重複する。桁行3間×梁行2 間の東西棟で、棟方位はN4°Wである。柱間は桁 行1.9m、梁行1.8mを測る。土師器皿・甕、灰釉陶 器椀 (80)、青磁椀 (81) 等が出土しており、Ⅱ-4~Ⅲ-1期のものと考えられる。柱掘形の1つで は、柱痕跡上部で礫と土師器椀が重なった状態で出 土しており、建物廃絶後に祭祀行為が行われた可能 性がある。SB9874・9875・9876の前後関係につい ては、出土遺物や重複関係より、SB9876→SB 9874→SB9875の順であったと考えられる。

SB9920 調査区中央北部に位置し、桁行4間× 梁行2間の東西棟の掘立柱建物で、棟方位はN4° W。柱間は桁行2.2m、梁行2.1mを測る。柱掘形は ほとんどのものが、長辺1m前後×短辺0.5m前後 の長方形を呈している。梁行中央の棟持柱掘形が桁 行と異なり南北に長いことから、長方形の柱掘形を 持つ1棟の建物と判断した。ただ、建て替えによっ て方形の柱掘形が重複し、長方形を呈している可能 性も考えられる。出土遺物は、土師器や土錘が僅か に出土したのみであり、時期決定は出来なかった が、西側に位置するSB9875と北面をほぼ揃えてい ることから、並存していた可能性が考えられる。

S D 9886 調査区東部に位置する南北溝で、方位はN1°E。幅0.4m・深さ0.1m程度で、土師器椀(84・85)・皿、ロクロ土師器皿、灰釉陶器椀、土錘等が出土している。Ⅲ-1期のものと考えられる。

SK9924 調査区東辺中央部に位置する浅い溝状の土坑で、長径6m×短径2mの長方形を呈する。底部でSB9880の柱掘形を確認していることから、この建物に後出する遺構である。土師器皿・台付皿・甕(83)、黒色土器椀、須恵器甕、灰釉陶器椀(82)・壺等が出土している。椀形鉄滓も出土しており、近くで鉄製品の生産が行われていた可能性も考えられる。Ⅲ-1期に属するものと考えられる。

#### (5) 斎宮Ⅲ-2~3期の遺構

SB9879 調査区西部に位置する掘立柱建物で、 桁行5間×梁行2間の掘立柱建物である。棟方位は N2°Wで、柱間は桁行1.85m、梁行2.1mを測る。 柱痕上部より、砥石(106)を土師器椀(105)に納めた状態で確認されており、建物廃絶後に祭祀行為 が行われたと考えられる。

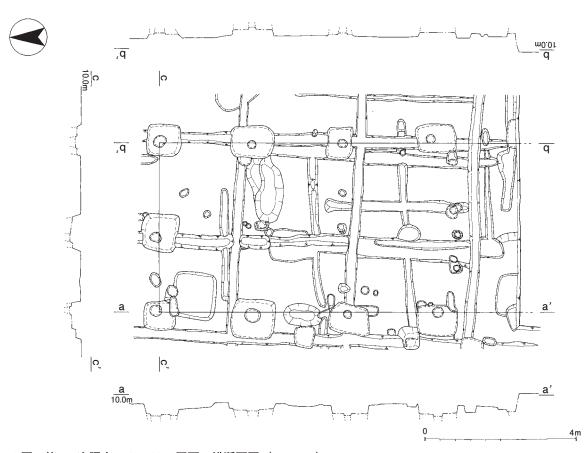
S D 9884 調査区東部、S D 9886の西1mに位置

する南北溝で、方位はN2°E。幅0.4m・深さ0.1 mで、須恵器甕、灰釉陶器椀、山茶椀(107)等が 出土しており、Ⅲ-3期と考えられる。

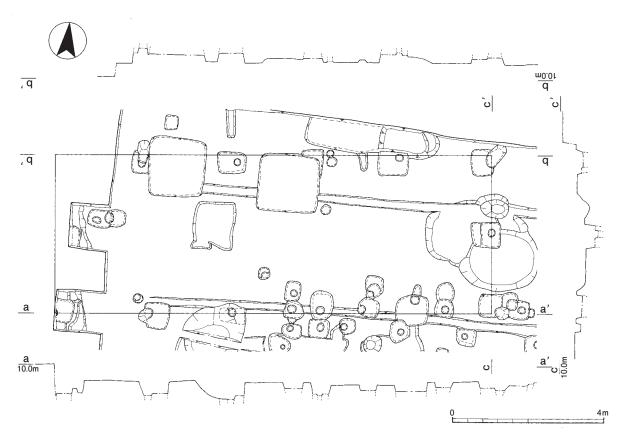
S D9897 調査区中央部を東西に走る溝で、蛇行するものの、方位は概ねE7°~8°Nである。幅0.6 m・深さ0.1m程度で、重複関係よりSD9907に後出し、SD9901に先行する。土師器杯(86)、須恵器杯、灰釉陶器椀、白磁椀、山茶椀、鉄滓等、多様な遺物が出土しており、Ⅲ-3期と考えられる。

S K9940 調査区東端中央部に位置する土坑で、S K9926の底部で確認された遺構である。長径1.5 m×短径0.9mの楕円形を呈する。深さは0.3mで、底部より土師器小皿( $87\sim95$ )・杯( $98\sim103$ )、ロクロ土師器小皿( $96\cdot97$ )・椀(104)がまとまって出土している。 $\Pi-2$ 期のものである。

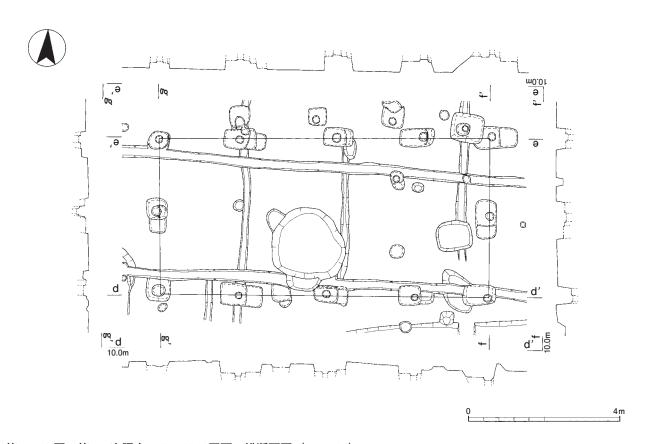
S K9926 S K9940の埋没後に掘削された土坑で、長径2.6m×短径1.8mの楕円形を呈する。深さは0.15mで、土師器杯(108~112)、ロクロ土師器皿(113~115)、灰釉陶器椀、山茶椀(116)等が出土している。Ⅲ-3期のものである。



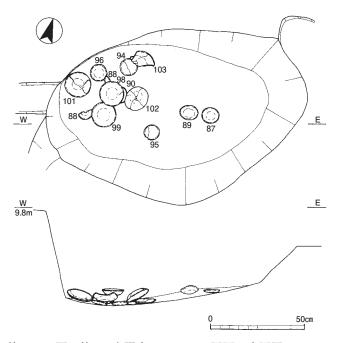
第I-6図 第157次調査 SB9900平面・横断面図 (1:100)



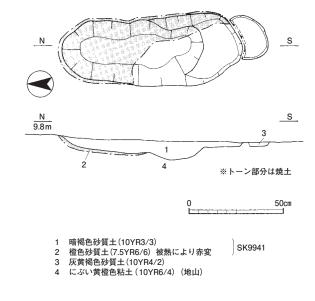
第Ⅱ-7図 第157次調査 SB9910平面・横断面図(1:100)



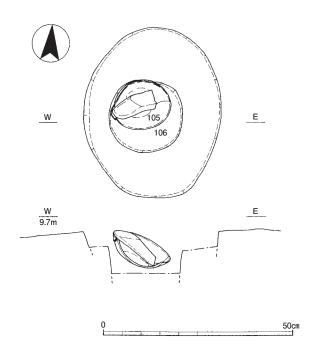
第I-8図 第157次調査 SB9920平面・横断面図 (1:100)



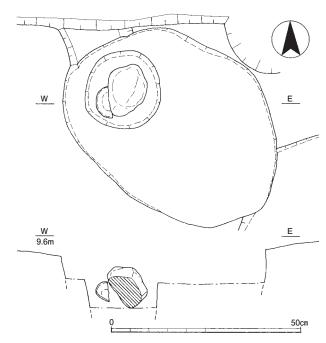
第I-9図 第157次調査 SK9940平面・立面図 (1:20)



第Ⅱ-10図 第157次調査 S K 9941平面・断面図 (1:20)



第Ⅱ-11図 第157次調査 S B 9879 (u14p1) 平面・ 立面図 (1:10)



第Ⅱ-12図 第157次調査 S B 9875(v13p9)平面・ 立面図(1:10)

Sala Palla ( .	調査時	ピット番号	-1. !!!	規模	柱間寸法	\ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \ \	方位	NII. Id
遺構名	遺構名	※( )はグリッド番号	時期	間(m)×間(m)	(m)	主軸	(N規準)	備考
SB9872	建物 4	(u17)P6·P7·P9/(v17)P1	不明	3以上(4.8以上)	(桁行)1.6 (梁行) -	東西	N4° W	
SB9873	建物 6	(x11)P3·P4·P5·P6/(y11) P5	I -4	$3(6.0) \times 2(3.6)$	(桁行)2.0 (梁行)1.8	東西	N4° W	
SB9874	建物8	(u12)P6·P8/(u13)P11/(v12) P6/(v12)P14/(v13)P2·P15/ (w12)P7·P9/(w13)P1	Ⅱ -3~4	$3(5.7) \times 2(4.2)$	(桁行)1.9 (梁行)2.1	東西	N0°	SB9876より新
SB9875	建物9	(u12)P3·P10/(u13)P6/(v13) P9·P19/(v12)P15/(v13)P19/ (w12)P10·P14	Ⅱ -4~ Ⅲ -1	$3(5.7) \times 2(3.6)$	(桁行)1.9 (梁行)1.8	東西	N4° W	SB9874より新
SB9876	建物10	(ul2)P7·Pl3/(ul3)Pl6/(vl2) P8·Pl0/(vl3)P4·Pl7/(wl3) P7	Ⅱ -3	$3(5.7) \times 2(3.6)$	(桁行)1.9 (梁行)1.8	東西	N0°	SB9910·SK9934より新
SB9877	建物11	(t12)P6/(t13)P4·P8/(u13)P7 /(v12)P9/(v13)P14	Ⅱ -3~4	$3(5.7) \times 2(4.0)$	(桁行)1.9 (梁行)2.0	東西	N7° W	SB9876より新
SB9878	建物12	(t13)P3·P7/(u13)P5·P10/ (u14)P10·P12/(v14)P8	Ⅱ -3~	$3(5.7) \times 2(3.6)$	(桁行)1.9 (梁行)1.8	東西	N7° W	SB9877より新
SB9879	建物13	(u13) P3 · P8 · P12/(u14) P1 · P8/(u15) P2 · P5 · P6/(v13) P13/(v14) P9/(v15) P5 · P7	Ⅲ -2	5(9.25) × 2(4.2)	(桁行)1.85 (梁行)2.1	南北	N2° W	
SB9880	建物 1	(b14)P2/(c13)P2·P3/(c14) P3·P8/(c15)P7/(d13)P2/ (d14)P2/(d15)P1·P5	I -4	$3(7.2) \times 2(4.6)$	(桁行)2.4 (梁行)2.3	東西	N3° W	SK9924より古
SB9881	建物14	(w13)P5/(w14)P1·P13/(x13) P1/(x14)P1·P2/(x15)P3·P4	II -2	$3(5.4) \times 2(4.0)$	(桁行)1.8 (梁行)2.0	南北	N3° E	
SB9882	建物15	(y11)P3·P4/(y12)P1	不明	$4(8.4) \times 2(4.2)$	(桁行)2.1 (梁行)2.1	南北	N8° W	
SB9883	建物16	(u16)P1·P3/(u17)P2·P3/ (v16)P3·P4/(v17)P3·P9	I -4?	$3(4.2) \times 2(3.0)$	(桁行)1.6? (梁行)1.5?	南北	N0° ~ 5° W	SK9941を囲む建物? SB9900より古
SB9890	建物2	(x15)P1·P2/(x16)P1/(y15) P1·P2/(y16)P2·P3/(a15)P2· P3/(a16)P3	II −1~2	$3(6.3) \times 2(4.0)$	(桁行)2.1 (梁行)2.0	東西	N0°	
SB9900	建物3	(v15)P3/(v16)P1·P6/(v16) P6/(w15)P2/(w16)P1·P2/ (w17)P4/(w18)P8	I -4	4以上(9.3以上) ×2(4.8)	(桁行)2.4 (梁行)2.4	南北	N3° W	SB9883より新
SB9910	建物5	(t11)P2/(t12)P5/(u11)P1·P2/ (u12)P9/(v11)P3·P4/(v12) P12/(w12)P5	I -4	5(11.5) × 2(4.0)	(桁行)2.3 (梁行)2.0	東西	N4° W	SK9930より古
SB9920	建物7	(w12)P11/(x12)P2/(x13)P1· P3/(y11)P1/(y12)P4·P6/ (a13)P3	Ⅱ −4~ Ⅲ −1	$4(8.8) \times 2(4.2)$	(桁行)2.2 (梁行)2.1	東西	N4° W	

第Ⅱ-1表 第157次調査 掘立柱建物一覧表

遺構名	調査時 遺構名	グリッド	時期	出土遺物	備考
SD9884	溝 1	c13-c14	<b>Ⅲ</b> −3	土師器、須恵器甕、灰釉陶器椀	
SD9885	溝 3	e13	Ⅲ -1	土師器杯・甕・甑、ロクロ土師器皿、須恵器甕、 白磁椀・青磁椀	
SD9886	溝 6	c13-c14	Ⅲ -1	土師器皿A、ロクロ土師器皿、灰釉陶器椀、土錘	
SD9887	溝 9	d13-d14	Ⅲ -1	土師器皿・甕、ロクロ土師器皿、須恵器甕・蓋	
SD9888	溝10	a13	不明	土師器	
SD9889	溝11	e13	不明	土師器	
SD9891	溝13	d13-d14	Ⅲ -1	土師器皿・甕、ロクロ土師器皿、黒色土器、灰釉 陶器椀・段皿	
SD9892	溝14	c13-d13	不明	土師器、須恵器杯	
SD9893	溝15	d13-d14	Ⅱ -2	土師器杯・皿・甕・甑	
SD9894	溝16	d14	<b>I</b> −1~2	土師器台付皿・甕、ロクロ土師器皿、須恵器杯・ 蓋、白磁皿	
SD9895	溝17	b14	不明	土師器	
SD9896	溝26	c14-d14	Ⅲ -1	土師器、白磁皿	
SD9897	溝27	a13-	<b>Ⅲ</b> −3	土師器椀A・台付皿・甕、須恵器杯、灰釉陶器 椀・小椀、白磁椀、山茶椀、鉄滓	SD9907より新 SD9901より古
SD9898	溝33	x15	不明	土師器	
SD9899	溝39	x16-x17	不明	土師器	
SD9901	溝41	e13 – w13	中世後期	土師器皿・甕・鍋・羽釜、須恵器甕、灰釉陶器 椀、山茶椀	SD9902より新
SD9902	溝42	b13-t14	鎌倉前期~	土師器甕、須恵器杯・甕、山茶椀、常滑甕	SD9901より古
SD9903	溝43	b13	不明	土師器	
SD9904	溝51	u10-u11	不明	土師器	
SD9905	溝53	v12	不明	土師器	
SD9906	溝54	a14	Π?	土師器、須恵器甕	
SD9907	溝55	e12	Ⅱ -1	土師器甕・高杯・把手片、須恵器甕、白石	SD9897より古
SD9908	溝56	b11 - b12	不明	土師器	
SD9909	溝58	w17	不明	土師器	
SD9911	溝60	x13	不明	土師器	
SD9912	溝68	v14	Π?	土師器	
SD9913	溝71	v16	Π ?	土師器	
SD9914	溝73	w15	Π ?	土師器把手片、須恵器甕	

第Ⅱ-2表 第157次調査 遺構一覧表(1)

遺構名	調査時遺構名	グリッド	時期	出土遺物	備考
SD9915	溝74	u16-u17	不明	土師器	
SD9916	溝75	e10-e11	不明	土師器	
SD9917	溝77	u18-v18	中世	土師器、須恵器、常滑甕	
SK9919	土坑4	c14	<b>Ⅲ</b> −3	土師器皿、ロクロ土師器皿	SK9926より新
SK9921	土坑8	c15	Ⅱ?	土師器甕	
SK9922	土坑11	d14	Ⅱ ?	土師器	
SK9924	土坑14	c15	Ⅲ -1	土師器皿・台付皿・甕、黒色土器杯、須恵器甕、 灰釉陶器椀・壺、椀形鉄滓、炭化材	SB9880より新
SK9925	土坑15	d14	Ⅲ -2	土師器杯・皿・台付皿・甑、ロクロ土師器皿、須 恵器甕、鉄滓	SK9926より古
SK9926	土坑16	d14	<b>Ⅲ</b> −3	土師器椀・皿、ロクロ土師器皿、灰釉陶器椀、山 茶椀	SK9925・SK9940より新
SK9927	土坑17	x15-x16	Ⅱ ?	土師器甕、須恵器	
SK9928	土坑19	w12 - w13	II -3	土師器杯・皿・甕、灰釉陶器皿	
SK9929	土坑21	v12	Ⅱ ?	土師器、須恵器	
SK9930	土坑22	u12	II -3	土師器杯A・椀A・皿A・鉢A・甕A・甑、灰釉陶器段皿、志摩式製塩土器	SB9910より新
SK9931	土坑23	x12-y12	I -4	土師器杯A・椀A・ⅢA・甕A、黒色土器椀	
SK9932	土坑25	e12	<b>Ⅲ</b> −1~2	土師器甕・甑、ロクロ土師器皿	
SK9933	土坑26	v11 – w11	II -3	土師器杯A・椀A・皿A・甕A、須恵器甕、灰釉陶器椀、志摩式製塩土器、鞴羽口	
SK9934	土坑27	w13	Ⅱ -1~2	土師器杯A・椀A・椀B・台付椀・皿A・盤・鉢・甕・鍋、須恵器杯B・杯B蓋・台付盤・甕、鉄滓	SB9876・SK9939より古
SK9935	土坑30	t15 – u15	Ⅱ ;	土師器杯・甕・甑、須恵器甕	
SK9936	土坑31	t15 – u16	Ⅱ ;	土師器甕、須恵器壺	
SK9937	土坑32	u15-v16	Ⅱ ?	土師器	
SK9938	土坑33	v14	Ⅱ ?	土師器杯・甕、須恵器、黒色土器椀	
SK9939	土坑34	w13	Π ?	土師器甕・台付椀、須恵器	SD9897より古
SK9940	土坑28	c14	<b>Ⅲ</b> −2	土師器杯・皿、ロクロ土師器皿	SK9926より古
SK9941	土坑35	v17	I −4~ II −1	土師器	
SK9942	土坑36	d10-e10	不明	土師器	
SK9943	土坑37	e13	Ⅱ -1~2	土師器杯・甕	
SK9944	土坑39	v15	Ⅱ ?	土師器	

第Ⅱ-2表 第157次調査 遺構一覧表(2)

#### (6) 鎌倉時代以降の遺構

S D9901 調査区中央部を東西に貫く溝で、幅2.5 ~ 2.9m、深さ0.3mを測る。土師器皿・甕・鍋・羽釜、須恵器甕、灰釉陶器椀、山茶椀等が出土しており、南伊勢系の土師器鍋も含まれ、埋没は中世後期頃と考えられる。

**S D9902** S D9901の中央部分を再掘削した溝で、幅0.9~1.4m、深さ0.25mを測る。方位は概ねE 5°Nで、土師器や須恵器、山茶椀、常滑製甕等が出土している。中世後期に埋没するものと考えられる。 (新名 強)

#### 4 出土遺物

第157次調査では、一次整理の段階で整理箱107箱 分の遺物が出土している。土器類以外に鉄滓や志摩 式製塩土器が多数出土している点が注目される。

#### (1) I-4期の遺物

SB9900出土遺物  $(10\cdot 11)$  土師器杯Aと皿Aがある。杯A (10) は平坦な底部から、口縁部が直線的に延びる。皿A (11) は、口径15.7cmで、口縁部は外反する。

SK9931出土遺物(1~9) 出土遺物の大半が土師器で、杯A・椀A・皿A・甕Aがあるほか、黒色土器椀がある。土師器の杯・椀・皿類はすべて底部をナデ調整する。杯Aは口縁部がまっすぐ立ち上がる(1・3)と、口縁部が強く外反する(2)がある。椀A(5)は内面に螺旋暗文を施し、外面をヘラミガキする。底部外面に墨書されるが、判読できない。皿Aは、口縁部が外反する(6)と内弯する(7)がある。甕A(8)は、半球形の胴部に外反し大きく開く口縁部がつく。甕(9)は、胴部外面に粗いハケ調整を施す。黒色土器(4)は、内面のみ黒色化するA類で、内面をヘラミガキ、外面をヘラケズリする。

#### (2) Ⅱ-1~2期の遺物

S K9934出土遺物 (12 ~ 34) 土師器には杯 A・ 椀 A・椀 B・皿 A・甕・盤・鍋がある。杯 A (12 ~17) は、口径12.3 ~ 13.1cmの小型品 (12 ~ 14) と14.3 ~ 15.6cmの大型品がある。椀 A (18 ~ 20) のうち、(19) は放射暗文と螺旋暗文を、(20) は斜 格子状暗文と螺旋暗文を内面に施し、外面をヘラケ ズリする。皿A  $(22 \sim 27)$  は、口縁部が外反する  $(22 \sim 25)$  と弓なりにひろがる  $(26 \cdot 27)$  がある。 甕  $(28 \cdot 29)$  は平底で、胴部下半をヘラケズリする。 鉢 (30) は器壁が厚く、平坦な底部から口縁部が大きく開く。鍋 (31) は、口径39.6cmの大型品である。

須恵器は、杯B・杯B蓋・台付盤がある。杯B (33) は平坦な底部から口縁部がのび、口縁部と底部との境近くに角高台が付く。杯B蓋 (32) は丸みをもった天井部に宝珠形つまみが付き、口縁部は下方へ屈曲する。台付盤 (34) は、(32) の杯B蓋を天地逆にした形状で、底部に高台が付く。

土器類以外では、鉄滓も出土している。

#### (3) I-3~4期の遺物

**S K 9930出土遺物** (35 ~ 53) 土師器が大半を占めるが、ほかに灰釉陶器段皿・志摩式製塩土器が出土している。

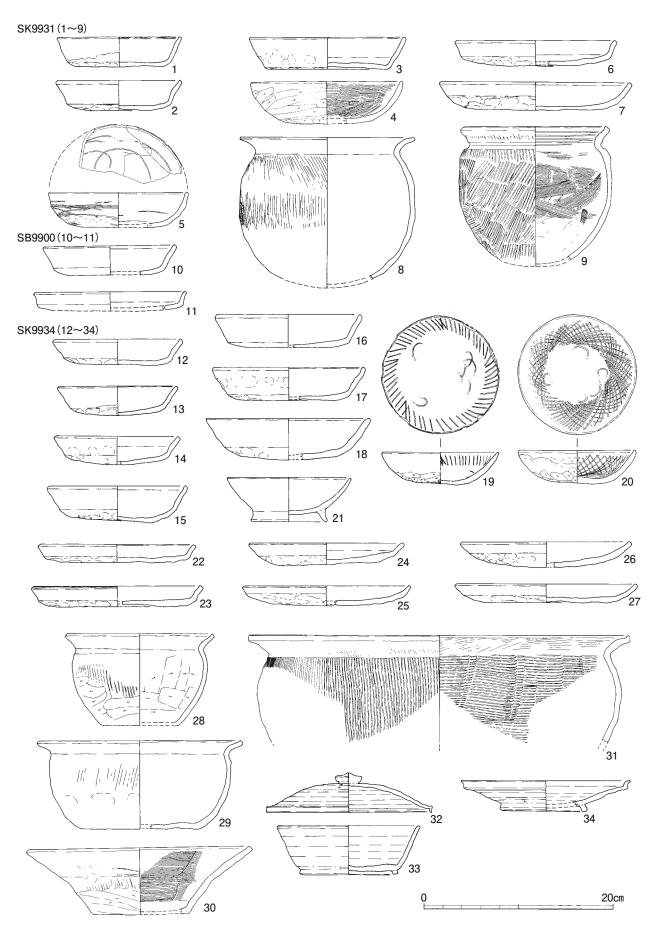
土師器には、杯A・椀A・皿A・甕Aがある。杯A( $35\sim37$ )は口径 $14.0\sim14.4$ cmである。口縁部は明瞭に外反する。椀A( $38\cdot39$ )は小型品で杯Aとの区別がつきにくい(38)と大型品の(39)がある。皿Aは、口縁部が弱く外反し外側に面をもつ( $40\cdot41$ )と、器高が浅く断面が弧状になる( $42\sim45$ )がある。甕A( $46\cdot47$ )は口縁部が内弯気味にのび、端部を上方につまみあげる。鉢(48)は平坦な底部をもち、口縁部は大きく開く。胴部外面下半と内面をヘラケズリする。

灰釉陶器段皿 (49) は、明瞭な段を有する。釉は ハケ塗りで施される。

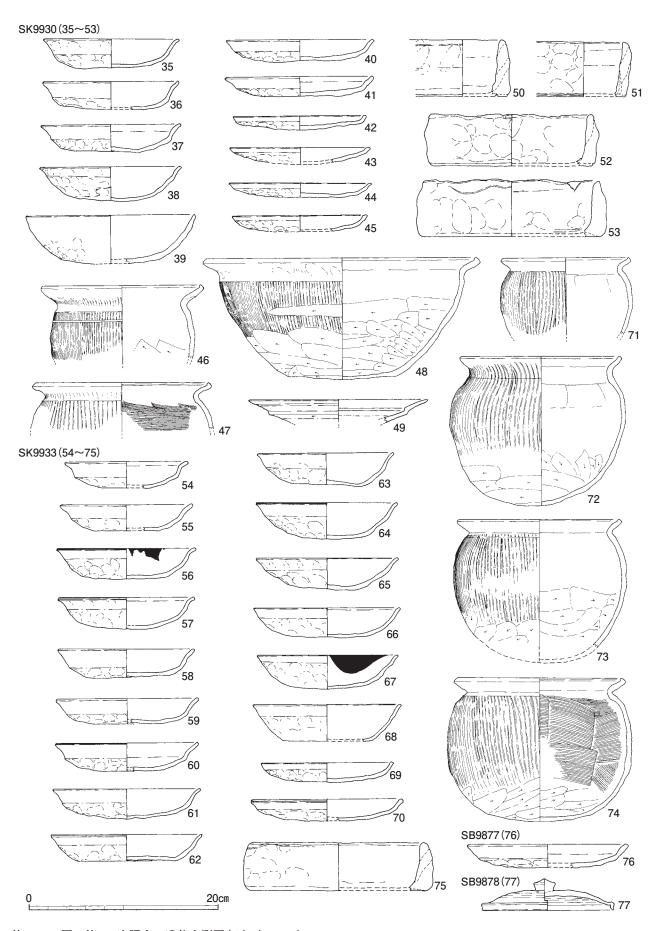
志摩式製塩土器 (50 ~ 53) が比較的まとまって 出土している点は注目される。口縁部は上方に伸 び、端部が尖り気味になる。

S K9933出土遺物 (54~75) 土師器が大半を占めるが、須恵器、灰釉陶器、志摩式製塩土器、鞴羽口等も出土している。

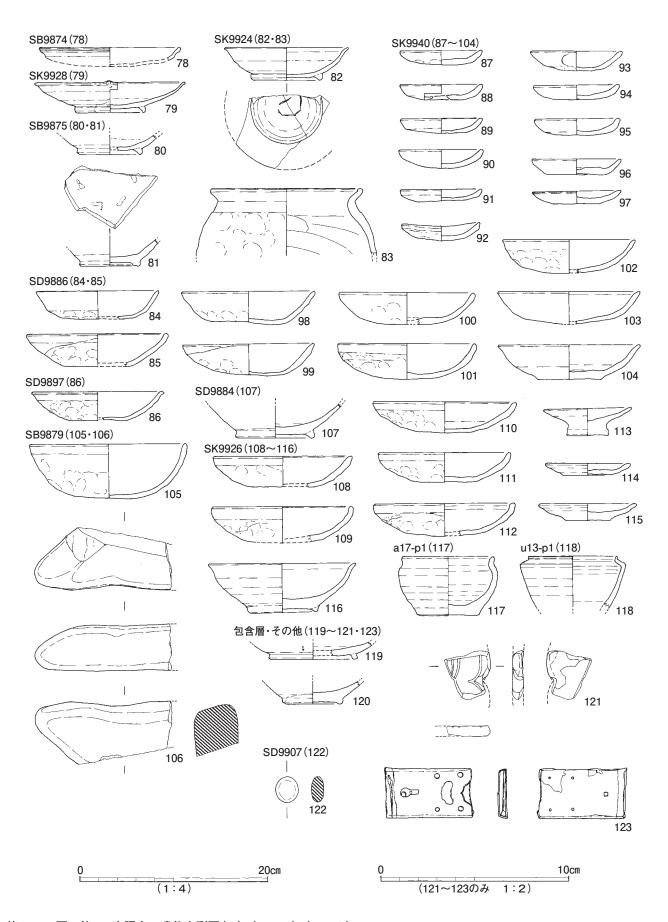
土師器には、杯A・椀A・皿A・甕Aがある。杯A (54~62) は口径12.7~15.8cmで、14cm前後のものが多く、口縁部の外反は明瞭である。椀A (63~68)は口径14.0~15.2cmで15cm前後のものが多い。 皿A (69·70) は口縁部が弧状になる (69) と外反する (70) がある。甕A (71~74) は、球状の胴部に端部を上方につまみ上げる短い口縁部が付く。



第 Ⅱ -13図 第157次調査 遺物実測図(1)(1:4)



第Ⅱ-14図 第157次調査 遺物実測図(2)(1:4)



第 Ⅱ -15図 第157次調査 遺物実測図(3)(1:4)(1:2)

悉			地区				Ī., .				I	登録
番号	器種	器形	遺構		(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	番号
1	土師器	杯A	SK9931	口径 器高 口径	3.2	外面: ナデ、オサエ後ナデ         内面: ナデ         外面: ナデ、オサエ後ナデ	緻密	良	明赤褐5YR5/8	口縁部 5/12 口縁部	外面に粘土接合痕	009-01
2	土師器	杯A	SK9931	器高	3.2	内面:ナデ	緻密	良	橙7.5YR6/6	5/12	外面に粘土接合痕	009-02
3	土師器	杯A	SK9931	口径器高	3.4	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	緻密	良	橙5YR6/8	口縁部 4/12		009-03
4	黒色土器	椀	SK9931	口径器高	4.5	外面:ナデ、ヘラケズリ 内面:ミガキ後黒化処理	緻密	良	外面:浅黄橙10YR8/4 内面:黒7.5Y2/1	口縁部 8/12		009-07
5	土師器	椀A	SK9931	口径器高	3.7	外面:ナデ、オサエ後ミガキ 内面:ナデ後螺旋状暗文	密	良	橙 5 YR6/6	口縁部 3/12	外底面に墨書	009-06
6	土師器	ШA	SK9931	口径 器高	2.7	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	外面:橙5YR6/8 内面:明黄褐10YR7/6	口縁部 3/12	外面大部分に煤付着	009-04
7	土師器	ША	SK9931	口径 器高		外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 4/12		009-05
8	土師器	甕A	SK9931	口径	18.1		密	やや 不良	浅黄橙10YR8/4	口縁部 1/12		010-02
9	土師器	甕	SK9931	口径 残高		外面:ナデ、ハケ 内面:ナデ、ハケ、オサエ後ナデ	密	良	黄灰2.5Y6/2	口縁部 3/12	内面に当て具痕	010-01
10	土師器	杯A	SB9900	口径 器高	13.6 3.1	調整不明	密	良	橙7.5YR6/6	小片		014-06
11	土師器	<b></b> A	SB9900	口径	15.7	調整不明	密	良	橙7.5YR6/6	口縁部 1/12		014-05
12	土師器	杯A	SK9934	口径 器高		外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 8/12		011-01
13	土師器	杯A	SK9934	口径 器高		外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 4/12		011-04
14	土師器	杯A	SK9934	口径 器高		外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 8/12		011-05
15	土師器	杯A	SK9934	口径 器高		外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/8	完形		018-01
16	土師器	杯A	SK9934	口径器高	14.9 3.5	調整不明	密	やや 不良	橙5YR7/8	口縁部 5/12		011-03
17	土師器	杯A	SK9934	口径器高		外面: ナデ、オサエ後ナデ 内面: ナデ	密	良	橙5YR7/6	口縁部 4/12		011-02
18	土師器	椀A	SK9934	口径器高		外面:ナデ、オサエ後ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/4	口縁部 7/12		012-06
19	土師器	椀A	SK9934	口径器高	12.0	外面:ナデ、ヘラケズリ 内面:ナデ、ナデ後放射・螺旋状暗文	密	良	橙5YR6/8	完形	内面磨滅	018-03
20	土師器	椀A	SK9934	口径器高	12.1	外面:オサエ後ナデ・ヘラケズリ 内面:オサエ後ナデ・斜格子状暗文	密	良	橙5YR6/8	完形	外面に粘土接合痕	011-08
21	土師器	椀B	SK9934	口径器高	12.8 4.7	底部:貼付高台	密	やや 不良	外面:橙5YR6/8 内面:橙7.5YR7/6	底部 完形	内面に漆付着	012-01
22	土師器	ША	SK9934	口径器高	16.2	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 5/12		011-06
23	土師器	ШA	SK9934	口径器高	17.5	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 5/12	口縁部に沈線	011-07
24	土師器	ШA	SK9934	口径器高	16.0	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	やや 粗	やや 不良	橙7.5YR6/8	口縁部 8/12		018-02
25	土師器	ШA	SK9934	口径器高	17.3	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 3/12		013-03
26	土師器	ШA	SK9934	口径器高	17.5	外面:ナデ、オサエ後ナデ  内面:ナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 8/12		013-04
27	土師器	ШA	SK9934	11/2	18.7	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 3/12		012-07
28	土師器	甕	SK9934	口仅	15.2	外面:ナデ、ハケ、ヘラケズリ 内面:板ナデ、ナデ	密	良	橙5YR6/6	全体	外面に粘土接合痕 内面に煤付着	012-05
29	土師器	甕	SK9934	口径器高	21.1	外面:ナデ、ハケ、オサエ、ヘラケズリ 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	全体 4/12	外面に煤付着	012-03
30	土師器	鉢	SK9934	口径器高	23.8	外面:ナデ、オサエ後ハケ、ヘラケズリ 内面:ハケ・ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	全体 3/12	体部外面に墨書あり	013-02
31	土師器	鍋	SK9934	口径残高	39.6	外面: ナデ、タテハケ 内面: ハケ後ヨコナデ、ヨコハケ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 3/12	外面に煤付着	013-01
32	須恵器	杯B蓋	SK9934	口径器高	17.2	外面: ナデ、ケズリ 内面: ナデ	密	良	灰5Y6/1	口縁部 2/12		012-02
33	須恵器	杯B	SK9934	口径 器高	14.7	外面:ナデ、ケズリ、貼付高台 内面:ナデ	密	良	灰N6/	全体 8/12		018-04
34	須恵器	台付盤	SK9934	石石 口径 器高	17.6	外面:ナデ、ケズリ、貼付高台  内面:ナデ、ケズリ、貼付高台	密	やや軟調	外面:灰黄褐10YR6/2 内面:黄灰2.5Y6/2	全体 8/12		012-04
35	土師器	杯A	SK9930	口径 器高	14.0	  外面:ナデ、オサエ後ナデ  内面:ナデ	密	良	では、   でも、   でも	口縁部		004-02
36	土師器	杯A	SK9930	石石 口径 器高	14.2	外面:ナデ、オサエ後ナデ	密	良	橙5YR6/6	6/12 口縁部 空形		003-05
37	土師器	杯A	SK9930	一 口径 器高	14.4	内面:ナデ 外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/6 外底面:浅黄橙10YR8/4	完形 完形	口縁部内面に煤付着	003-02
38	土師器	椀A	SK9930	口径	14.4	内面:ナデ 外面:ナデ、オサエ後ナデ	密	良	グト氏田・浅真恒10Y R8/4 橙5YR6/8	完形	外面に粘土接合痕	004-06
39	土師器	椀A	SK9930	器高 口径	17.6	内面:ナデ  外面:ナデ、オサエ後ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部		003-03
40	土師器		SK9930	器高 口径	15.3	内面:ナデ  外面:ナデ、オサエ後ナデ	密	良	橙5YR6/8	2/12 口縁部		004-01
41	土師器	III.A	SK9930	器高 口径 器高		内面:ナデ  外面:ナデ、オサエ後ナデ	密	良	橙5YR6/8	5/12 口縁部		003-06
42	土師器	III.A	SK9930	口径	13.8	内面: ナデ  外面: ナデ、オサエ後ナデ	密		灰黄褐10YR4/2	7/12 口縁部	全体に炭化物付着	003-08
42	그다마66	ш.А	0173390	器高	1.5	内面:ナデ	血	尺	八只到1011(4/4	4/12	土件に灰儿物門盾	1000-00

| 42 | 土肺器 | ⅢA | SK9930 | 器高 | 1.5 | 内面: ナデ | 第Ⅱ-4表 第157次調査 遺物観察表(1)

番号	器種	器形	地区		(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録
<u>号</u> 43	土師器	III.A	遺構 SK9930	口径	14.8	  外面:ナデ、オサエ後ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部	表面磨滅	番号 003-09
44	土師器	III.A	SK9930	口径	14.9	内面: ナデ 外面: ナデ、オサエ後ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/6	5/12 口縁部	<b>火</b> 四/4/6%	003-07
45	土師器	III.A	SK9930	器高 口径	1.5	内面:ナデ  外面:ナデ、オサエ後ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	5/12 口縁部		003-04
46	土師器	- 選A	SK9930	口径	16.6	内面:ナデ  外面:ナデ、タテハケ	密	良	外面:にぶい黄橙10YR7/4	3/12 口縁部	外面に横線・煤付着	004-04
47	土師器	悪A	SK9930	口径	18.2	内面:ナデ、ヘラケズリ 外面:ナデ、タテハケ	密	良	内面:にぶい黄橙10YR7/4 橙7.5YR7/6	4/12 口縁部	/ P回 V= 使 / 从 门 / 自	004-03
48	土師器	金A 鉢A	SK9930	口径	18.1	内面:ナデ、ヘラケズリ 外面:ナデ、ハケ、ヘラケズリ	密	良	浅黄橙7.5YR8/6	3/12 口縁部		003-01
49	灰釉陶器	段皿	SK9930	器高 口径	12.9	内面:ナデ、ケズリ 外面:ナデ、ケズリ	密	良	素地:灰白2.5Y7/1	4/12 口縁部	内面に灰釉ハケヌリ	004-05
50	製塩土器	志摩式		器高	6.0	内面: ナデ   外面: オサエ後ナデ	やや	良	釉:浅黄2.5Y7/3 外面:灰黄褐10YR5/2	3/12 口縁部	底部に砂粒付着	004-03
51	製塩土器	志摩式	SK9930	器高	5.8	内面: ヨコナデ 外面: オサエ後ナデ	粗粗	良	内面:にぶい黄橙10YR7/3  外面:橙5YR6/6	2/12 口縁部	外面に灰白色物付着	004-07
52	製塩土器	志摩式	SK9930	口径		内面: ナデ·工具ナデ   外面: オサエ後ナデ	粗	良	内面:浅黄橙10YR8/3 外面:灰黄褐10YR5/2	1/12 口縁部	底部に砂粒付着   外面に煤付着	019-02
53	製塩土器	志摩式	SK9930	器高 口径		内面:オサエ後ナデ   外面:オサエ後ナデ	粗	良	内面:浅黄橙10YR8/3 外面:浅黄橙10YR8/4	1/12 口縁部	底部に砂粒付着 底部に砂粒付着	019-01
54	土師器	本A	SK9933	器高 口径		内面:オサエ後ナデ 外面:ナデ、オサエ後ナデ	密	良良	内面: にぶい橙5YR7/4 橙7.5YR6/6	2/12 口縁部	医的气形位用 有	007-05
55	土師器	杯A	SK9933	器高 口径	2.8	内面: ナデ 外面: ナデ、オサエ後ナデ	密	良良	外面:橙5YR6/6	2/12 口縁部		007-03
	土師器		SK9933	器高 口径	2.8	内面:ナデ 外面:ナデ、オサエ後ナデ		良良	内面:灰黄褐10YR5/2 橙5YR6/6	10/12 口縁部	口縁部に沈線	007-07
56		杯A	SK9933	器高 口径		内面:ナデ 外面:ナデ、オサエ後ナデ	密		橙51 R6/6 橙5YR6/8	11/12 ほぼ	油煙痕 口縁部に沈線	002-04
57	土師器	杯A	SK9933	器高 口径	3.4	内面:ナデ 外面:ナデ、オサエ後ナデ	密	良		完形 口縁部	内面一部に器面剥離	
58	土師器	杯A		器高 口径	3.1	内面:ナデ	密	良	橙5YR6/8	11/12 口縁部		002-05
59	土師器	杯A	SK9933	器高 口径	2.7	外面: ナデ、オサエ後ナデ 外面: ナデ、オサエ後ナデ	密	良	橙5YR6/6	5/12 口縁部		002-09
60	土師器	杯A	SK9933	器高 口径	3.0	内面:ナデ 外面:ナデ、オサエ後ナデ	密	良	橙5YR7/8	10/12	口縁部に沈線	002-07
61	土師器	杯A	SK9933	器高 口径	3.2	内面: ナデ	密	良	橙5YR6/6	3/12	- AT 400 - N. AM	002-08
62	土師器	杯A	SK9933	器高口径	2.8	外面: ナデ、オサエ後ナデ 外面: ナデ、オサエ後ナデ	密	良	橙5YR6/8 外面:黄灰2.5Y4/1	7/12 IEIE	口縁部に沈線	002-10
63	土師器	椀A	SK9933	器高口径	3.6	内面:ナデ 外面:ナデ、オサエ後ナデ	密	良	内面:橙7.5YR7/6	完形 口縁部		002-01
64	土師器	椀A	SK9933	器高 口径	3.9	内面:ナデ 外面:ナデ、オサエ後ナデ	密	良	橙5YR6/6	11/12	口縁部に沈線	002-03
65	土師器	椀A	SK9933	器高 口径	3.5	内面: ナデ   内面: ナデ   外面: ナデ、オサエ後ナデ	密	良	橙5YR6/6	10/12	内面に黒斑	002-02
66	土師器	椀A	SK9933	器高口径	3.2	内面: ナデ	密	良	橙5YR6/8	8/12		008-02
67	土師器	椀A	SK9933	器高口径	3.6		密	良	橙7.5YR7/6 外面:橙5YR6/8	完形 口縁部	口縁部油煙痕	007-03
68	土師器	椀A	SK9933	器高	3.9		密	良	内面:灰黄褐10YR4/2	ロ豚印 2/12 ほぼ	口縁部に沈線	007-06
69	土師器	ШA	SK9933	口径 器高	2.1	内面:ナデ	密	良	橙5YR6/6	完形		002-06
70	土師器	ШA	SK9933	口径 器高		外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	黄橙7.5YR7/8	口縁部 3/12	口縁部に沈線	008-03
71	土師器	甕A	SK9933		13.1	外面:ナデ、タテハケ 内面:板ナデ	密	良	外面:にぶい黄橙10YR7/4 内面:灰黄褐10YR6/2	口縁部 11/12	外面に煤付着	007-02
72	土師器	甕A	SK9933	口径 器高	15.9	外面:ナデ、タテハケ、ヘラケズリ  内面:ナデ、板ナデ、ヘラケズリ  外面:ナデ、ハケ、ヘラケズリ	密	良	外面: にぶい黄橙10YR7/3 内面: 灰黄褐10YR4/2	全体 8/12	外面に煤付着	008-01
73	土師器	甕A	SK9933	口径 胴径	18.2	内面:ナデ、ヘラケズリ	密	良	外面:灰褐(7.5YR4/2) 内面:明黄褐(10YR7/6)	全体 10/12	外面煤付着	020-01
74	土師器	甕A	SK9933	口径 器高	15.2	外面:ナデ、タテハケ、ヘラケズリ 内面:ハケ、ヘラケズリ	密	良	浅黄橙10YR8/4	口縁部 4/12	外面に煤付着 内面に灰化物付着	008-04
75	製塩土器	志摩式	SK9933	口径 器高	17.8 5.1	外面:オサエ	やや 粗	やや 不良	橙7.5YR6/6	小片		008-05
76	土師器	ШA	SB9877	口径 器高	3.0	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 2/12		015-06
77	須恵器	杯B蓋	SB9878	口径 器高		外面:ナデ、ケズリ 内面:ナデ	密	良	黄灰2.5Y6/1	全体 4/12		015-07
78	土師器	ША	SB9874	口径	14.7	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	にぶい橙7.5YR7/4	口縁部 2/12	口縁部に沈線	015-02
79	灰釉陶器	Ш	SK9928	口径 器高		外面:ナデ、ケズリ、貼付高台 内面:ナデ	密	良	素地:にぶい黄橙10YR7/2 釉:灰白25Y8/2	底部 完形	内外面灰釉ツケガケ	019-03
80	灰釉陶器	椀	SB9875	底径	6.4	外面:ナデ、ケズリ、貼付高台 内面:ナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	底部 2/12	内面に灰釉	015-03
81	青磁	椀	SB9875	底径		外面:ケズリ	密	良	素地:灰白2.5Y7/1 釉:オリーブ黄5Y6/3	底部 7/12	越州窯系青磁 内面に目痕	017-02
82	灰釉陶器	椀	SK9924	口径 器高		外面:ナデ、底部糸切痕、貼付高台 内面:ナデ	密	良	灰白2.5Y8/2	底部 8/12	底部にヘラ書き 内面灰釉ツケガケ	006-09
83	土師器	甕	SK9924	口径	15.7	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	やや 不良	淡黄2.5Y8/3	口縁部 2/12		006-10
84	土師器	椀A	SD9886	口径 器高	12.9 3.0	外面:オサエ	密	やや 不良	明黄褐10YR7/6	小片		014-03

番号	器種	器形	地区遺構	法量	(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
85	土師器	椀A	SD9886	口径 器高		   外面:ナデ、オサエ後ナデ   内面:ナデ	密	良	灰黄褐10YR6/2	口縁部 2/12	外面に粘土接合痕	014-04
86	土師器	杯A	SD9897	口径器高		   外面: ナデ、オサエ後ナデ   内面: ナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 3/12		014-02
87	土師器	小皿	SK9940	口径器高	8.5 1.6	内面:ナデ	粗	やや 不良	淡黄2.5Y8/4	完形		001-04
88	土師器	小皿	SK9940	口径器高	8.5 1.7	調整不明	粗	不良	淡黄2.5Y8/3	全体 6/12		001-11
89	土師器	小皿	SK9940	口径器高	8.4 1.6	内面:ナデ	粗	不良	淡黄2.5Y8/3	完形		001-10
90	土師器	小皿	SK9940	口径器高	8.5 2.0	調整不明	粗	不良	淡黄2.5Y8/3	完形		001-05
91	土師器	小皿	SK9940	口径器高	8.4 1.3	内面:ナデ	やや 粗	やや 不良	明黄褐10YR7/6	完形		005-04
92	土師器	小皿	SK9940	口径器高	8.1 1.9	調整不明	やや 粗	不良	淡黄2.5Y8/3	ほぼ 完形		005-05
93	土師器	小皿	SK9940	口径 器高	9.6 2.1	調整不明	密	不良	浅黄2.5Y7/4	完形	外面に粘土接合痕 内面に炭化物付着	001-12
94	土師器	小皿	SK9940	口径 器高	8.8 1.6	調整不明	粗	不良	淡黄2.5Y8/3	完形		001-08
95	土師器	小皿	SK9940	口径 器高	8.6 1.8	内面:ナデ	粗	不良	淡黄2.5Y8/3	ほぽ 完形		001-09
96	ロクロ 土師器	小皿	SK9940	口径 器高	1.7	外面:底部糸切り痕 内面:ロクロナデ	粗	不良	淡黄2.5Y8/3	完形		001-03
97	ロクロ 土師器	小皿	SK9940	口径 器高	1.6	外面:ナデ、底部糸切痕 内面:ナデ	密	やや 不良	淡黄2.5Y8/4	口縁部 8/12		001-13
98	土師器	杯	SK9940	口径 器高	3.6	外面:板圧痕 内面:ナデ	やや 粗	やや 不良	橙7.5YR7/6	完形		001-01
99	土師器	杯	SK9940	口径 器高	13.7 3.4	調整不明	粗	不良	淡黄2.5Y8/4	完形	外面に粘土接合痕	001-02
100	土師器	杯	SK9940	口径 器高	14.0 3.4	調整不明	やや 粗	やや 不良	黄橙10YR7/8	口縁部 4/12	内面に黒斑	005-02
101	土師器	杯	SK9940	口径 器高	3.8	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	やや 粗	やや 不良	明黄褐10YR7/6	完形	外面に粘土接合痕	001-07
102	土師器	杯	SK9940	口径 器高	13.8 3.6	内面:ナデ	粗	不良	橙7.5YR7/6	ほぼ 完形	底部中央穿孔?	001-06
103	土師器	杯	SK9940	口径 器高	14.8 3.5	調整不明	粗	不良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 3/12		005-03
104	ロクロ 土師器	椀	SK9940	口径 器高	3.7	外面:ナデ、底部糸切痕 内面:ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	口縁部 4/12		005-01
105	土師器	椀	SB9879	口径 器高	16.4 5.8	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙10Y R7/3	口縁部 10/12	外面に煤付着	016-02
106	石製品	砥石	SB9879	厚さ	4.7	_	硬砂 岩		_	全体 6/12	重量660g 割れ面に研磨痕	016-01
107	陶器	椀 (山茶椀)	SD9884	底径	7.7	外面:ナデ、貼付高台 内面:ナデ	密	良	灰黄2.5Y7/2	底部 完形	内面に漆付着	014-01
108	土師器	杯	SK9926	口径 器高		外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	不良	橙7.5YR7/6	口縁部 2/12		006-05
109	土師器	杯	SK9926	口径	14.5	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	やや 不良	浅黄橙10YR8/4	口縁部 2/12	外面に粘土接合痕	006-04
110	土師器	杯	SK9926	口径器高	3.3	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	やや 粗	良	浅黄橙10YR8/3	口縁部 6/12		006-01
111	土師器	杯	SK9926	口径器高	3.2	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	やや 粗	不良	浅黄橙10YR8/4	口縁部 2/12		006-02
112		杯	SK9926	口径 器高	3.5	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	やや 粗	不良	浅黄橙10YR8/4	口縁部 2/12	外面に粘土接合痕	006-03
113	ロクロ 土師器	台付小皿	SK9926	口径器高	3.0	外面:ナデ、底部糸切痕 内面:ナデ	緻密	良	浅黄橙10YR8/3	底部 完形		006-11
114	ロクロ 土師器	小皿	SK9926	口径器高	1.3	外面:ナデ、底部糸切痕 内面:ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	全体 8/12		006-06
115	ロクロ 土師器	小皿	SK9926	口径器高	1.8	外面:ナデ、底部糸切痕 内面:ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	口縁部 2/12		006-07
116	陶器	椀 (山茶椀)	SK9926	口径 器高	5.3	外面:ナデ、貼付高台 内面:ナデ	密	良	黄灰2.5Y7/2	全体 10/12		006-08
117	須恵器	壺	al7 pl	口径 器高		外面:ナデ、底部糸切痕 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙10Y R6/3	全体 8/12		016-04
118	須恵器	壺E	u13 pl	口径	9.3	外面:ナデ 内面:ナデ	密	良	外面:褐灰10YR4/1 内面:黄灰2.5Y6/1	口縁部 2/12	L. L. Service Management of the Control of the Cont	016-06
119	緑釉陶器	▥	調査区 東壁	底径	9.0	外面:貼付高台	やや 粗	良	素地:灰白(N7/) 釉:浅黄(5Y7/4)	底部 3/12	外面に輪花 底部外面トチン痕	017-03
120	白磁	椀	表土	底径	5.6	外面:ケズリ後施釉、ケズリ出し高台	密	良	素地:灰白(5Y8/1) 釉:灰白(7.5Y8/2)	底部 完形	全面施釉	017-04
121	三彩陶器	不明	表土	厚さ	0.6	施釉·沈線	緻密	やや軟調	素地: 乳白945 緑釉: 千歳緑853~松葉色851 褐釉: 皂色959~唐茶963 白釉: 象牙色789~蒸栗色801	小片	唐三彩 晩唐頃か	017-01
122	白石	碁石?	SD9907	長径 短径 厚さ	1.20 0.65	-	-	-	灰白(2.5Y8/1)	完形	重量1.0 g 石英か?	020-2
123	金属製品	不明	t12 包含層	縦横厚さ	2.7 4.7 0.6	2枚の金属板で構成 丸鋲4箇所・角鋲1箇所	-	-	-	完形		018-05

第Ⅱ-6表 第157次調査 遺物観察表(3)

胴部外面は荒いハケの後、下半をヘラケズリする。

(75) は志摩式製塩土器で、口縁端部は丸い。

**SB9874出土遺物** (78) Ⅲ A (78) は、口縁端部を強くヨコナデする。他に土師器杯・甕・竈、灰釉陶器片が出土している。

**S K 9928出土遺物** (79) 灰釉陶器皿 (79) は、口縁部をナデて輪花の表現を施し、三日月状高台をもつ。Ⅱ - 3期に属する。

#### (4) Ⅱ-4~Ⅲ-1期の遺物

S B 9875出土遺物 (80·81) 土師器皿·甕·把手片、 灰釉陶器椀、青磁椀等が出土している。

灰釉陶器椀 (80) は、逆台形に近い高台が付き、 外面にケズリを施す。Ⅱ-4期に属する。(81)は、 越州窯系青磁椀で、内面に4箇所の硅砂の目痕が残 る。

S K 9924出土遺物 (82·83) 土師器皿·台付皿·甕、 黒色土器椀、須恵器甕、灰釉陶器椀・壺等が出土し ている。

土師器甕A (83) は、短い口縁部をもち、端部は 内側につまみ出される。

灰釉陶器椀(82)は、底部外面にヘラ描きがみられる。Ⅲ-1期に属するものと考えられる。

また、土器以外に椀形鉄滓や炭化物が出土しており、鉄製品の生産・加工が行われていたことを示唆するものとして非常に興味深い遺物である。

S D9886出土遺物 (84・85) 土師器械・皿、ロクロ土師器皿、灰釉陶器椀、土錘等が出土している。

土師器椀A (84・85) は、平坦な底部から口縁部が大きく開く。

#### (5) Ⅲ-2~3期の遺物

S D 9897出土遺物 (86) 土師器杯・台付皿・甕、 須恵器杯、灰釉陶器椀・小椀、白磁椀、鉄滓等、多 様な遺物が出土している。杯A (86) は口縁部の約 1/3をヨコナデする。Ⅲ-2期に属する。

SK9940出土遺物 (87~104) 土師器小皿 (87~95) は、口縁端部のみヨコナデする。土師器杯 (98~103) には、平底の (98) と丸底の (99~103) がある。ロクロ土師器は、小皿 (96·97) と椀 (104) がある。Ⅲ-2期に属する。

**SB9879出土遺物**(105·106) 土師器杯・椀・甕、 灰釉陶器椀、石製品が出土している。 椀(105)は口径16.4cm、器高5.8cmで、口縁端部 のみヨコナデする。砥石 (106) は硬質の砂岩性で、 わずかに研磨痕が見られる。Ⅲ - 2期に属する。

S D9884出土遺物 (107) 須恵器甕、灰釉陶器椀、 山茶椀等が出土している。

山茶椀 (107) は、内面に漆が付着している。Ⅲ - 3期に属する。

**S K 9926出土遺物** (108~116) 土師器杯・皿・台付皿、ロクロ土師器、皿・台付皿、灰釉陶器椀、山茶椀等が出土している。

土師器杯 (108~112) は口径14.5cm前後の (108~110・112) と14.0cm以下の (111) がある。いずれも口縁端部をヨコナデする。ロクロ土師器 (113~115) には、台付皿 (113) と皿 (114・115) がある。台付皿 (113) は厚い台部に器壁の薄い口縁部が付く。 (114) は山皿の形態に類似するのに対し、(115) は底部が突出する。山茶椀 (116) は外反する口縁部をもち、器高に対して口径が広い。Ⅲ – 3期に属する。

#### (6) その他の遺物

遺物包含層やPit出土の遺物 (117~123) である。 (117) は、小型の須恵器壺である。平坦な底部に は糸切り痕が残る。須恵器壺E (118) は、やや口 径の広い形態である。(119) は緑釉陶器皿、(120) は白磁椀である。(121) は唐三彩の破片で、緑・白・ 褐色の釉が内外面に施される。表面には沈線により 模様が施され、晩唐期のものと考えられる<sup>(1)</sup>。(122) は、白色玉石である。直径1.4cm、厚さ0.7cmで、表 面は磨かれている。形状から碁石の可能性が考えら れる。(123) は、用途不明の金属製品である。2枚 の板で形成されており、1枚をコの字形に加工し、 裏面を平らな板で蓋をしている。4箇所を鋲で固定 しており、両端は開放している。片方には、4mm ほどの幅で外側より何かを巻きつけていた痕跡が残 る。表面には鍵穴状の穴がと装飾された透かし孔お よび切れ込みがあり、鍵穴状部分の中には、裏面よ り鋲で固定した棒が存在する。帯状のものを留める 道具か、装飾品の可能性も考えられる。真鍮製であ ることから中世以降のもの(2)と考えられる。

(角正芳浩)

#### 5 まとめ

今回の調査区は、方格地割内の柳原区画の北西隅部にあたり、調査の結果16棟の掘立柱建物をはじめ、溝や土坑など多数の遺構を確認した。一方、調査区の北東部では土取りのため、東西区画道路の南側溝などの遺構は削平されていたが、土坑や柱掘形などの遺構が僅かに残存する部分もあり、本来この部分にも掘立柱建物などが存在していたと思われる。掘立柱建物の変遷については、大別して5期に分類することが出来る。

#### ① I - 4期

SB9873・9880・9883・9900・9910の5棟が確認された。SB9883を除いては、N3~4°Wの方位のものであり、SB9880とSB9900、SB9873とSB9910は建物の一面を揃えおり、計画性をもって配置されていることから、これら4棟は並存していたものと考えられる。また、5間×2間になると考えられるSB9900は、柱掘形が1mを超える大型の建物であり、同じく5間×2間のSB9910や3間×2間のSB9880も柱掘形が1m近くあり、この時期は大型の建物が多く見られる。

SB9900に先行するSB9883は、焼土坑SK9941を囲む簡易的な建物であったことも考えられる。SK9941が炉跡であると考えると、方格地割造営に伴い、釘など小規模な鉄製品の製造等が行われた可能性も考えられよう。

#### ② I - 1~2期

SB9881・9890の2棟が確認されている。この2 棟は方位が大きく異なることから、並存していな かったと思われる。

#### ③ II - 3~4期

区画北西部でSB9874・9876・9877・9878の4棟が確認された。これらの4棟は重複もしくは近接しており、並存しないものである。重複関係から、SB9876→SB9874→SB9877→SB9878の順に変遷する。

#### ④ Ⅱ - 4 ~ Ⅲ - 1 期

SB9875・9920の 2 棟を確認した。いずれも棟方位がN4°Wで、北面を揃えていることから、並存していた可能性が高い。

#### ⑤Ⅲ-2期

SB9879を1棟確認したのみである。 $\Pi - 2 \sim 3$ 期は、調査区東部でSK9924・9920・9926など土坑が集中し、東西溝SD9897が見られるが、調査区西部には遺構はほとんど確認されていない。

掘立柱建物の変遷を見ると、I-4期には大型の建物が多く、調査区の広範囲に建物が配置されている。また、 $SB9910\cdot9873$ は、北側の区画道路まで4m程の位置にあり、柳原区画北西部では、方格地割造営当初より区画端隅まで利用した建物配置がなされていた事が窺える。II-3期 $\sim III-1$ になると、建物は調査区北西部に集中し、短期間で建て替えが行われている。III-2期以降は、建物がほとんど見られなくなる。

(新名 強)

#### 【註】

- (1) 弓場紀知氏(京都橘大学)のご教示を得た。
- (2) 金属製品については、松村恵司氏をはじめ奈良文 化財研究所藤原調査部の方々から、多くのご教示 を得た。

写真図版 Ⅱ - 1 第157次遺構(1)



調査区全景(南から)



調査区全景(西から)

写真図版 I - 2 第157次遺構 (2)

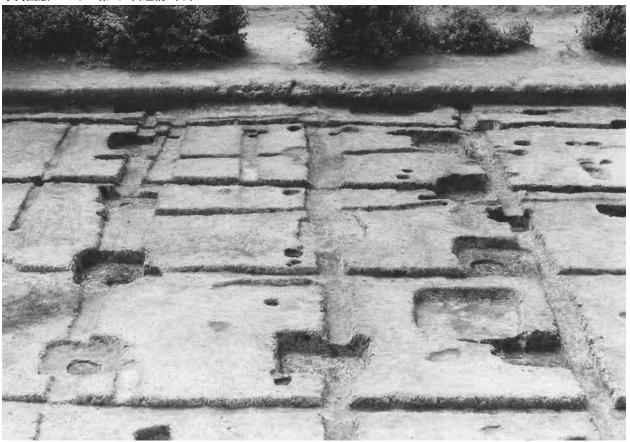


SB9880 (東から)



SB9890(東から)

写真図版 Ⅱ - 3 第157次遺構(3)

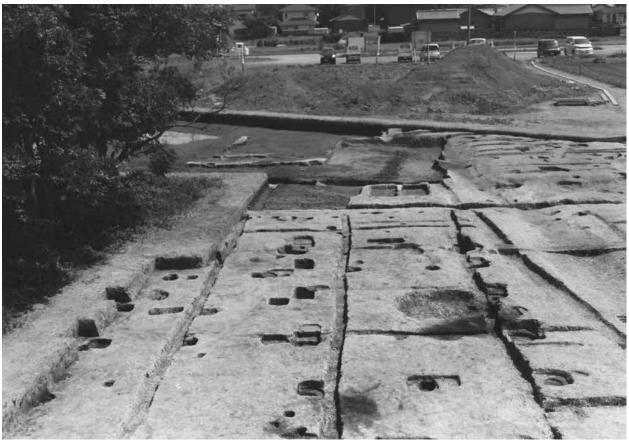


SB9900(北から)



SB9910(東から)

写真図版 Ⅱ - 4 第157次遺構 (4)

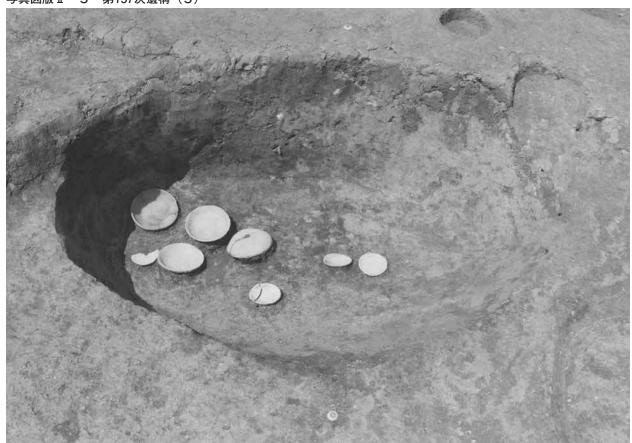


SB9873・9920(西から)



SB9892(北から)

写真図版 I - 5 第157次遺構 (5)

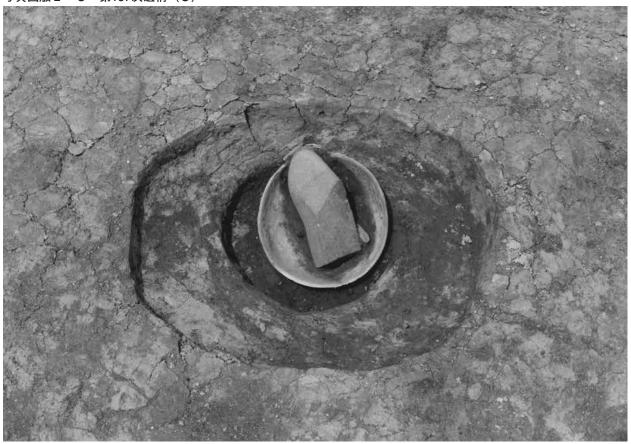


SK9940(東から)



SK9941(南から)

写真図版Ⅱ-6 第157次遺構(6)

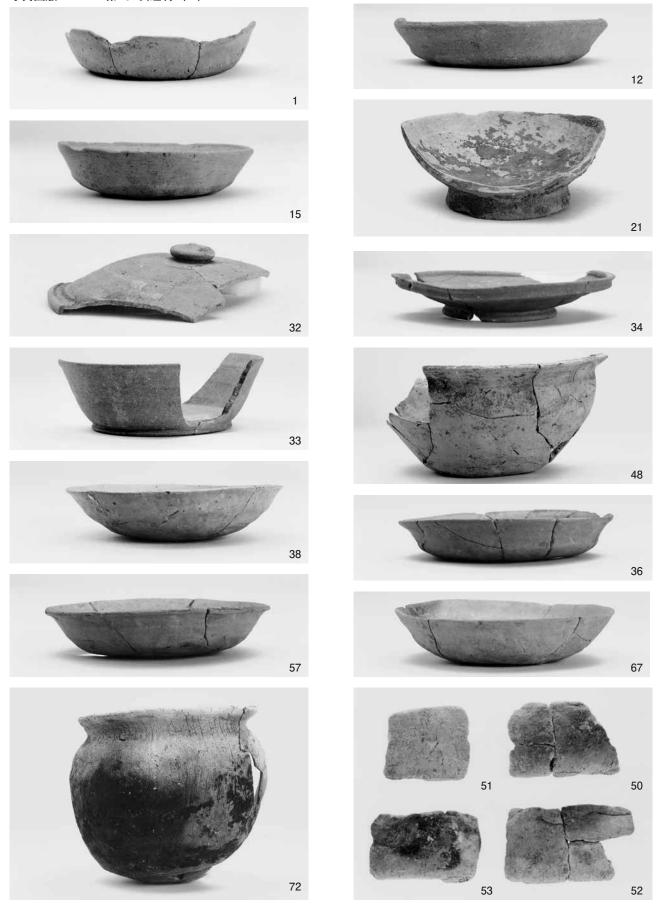


SB9879 (u14p1) (東から)

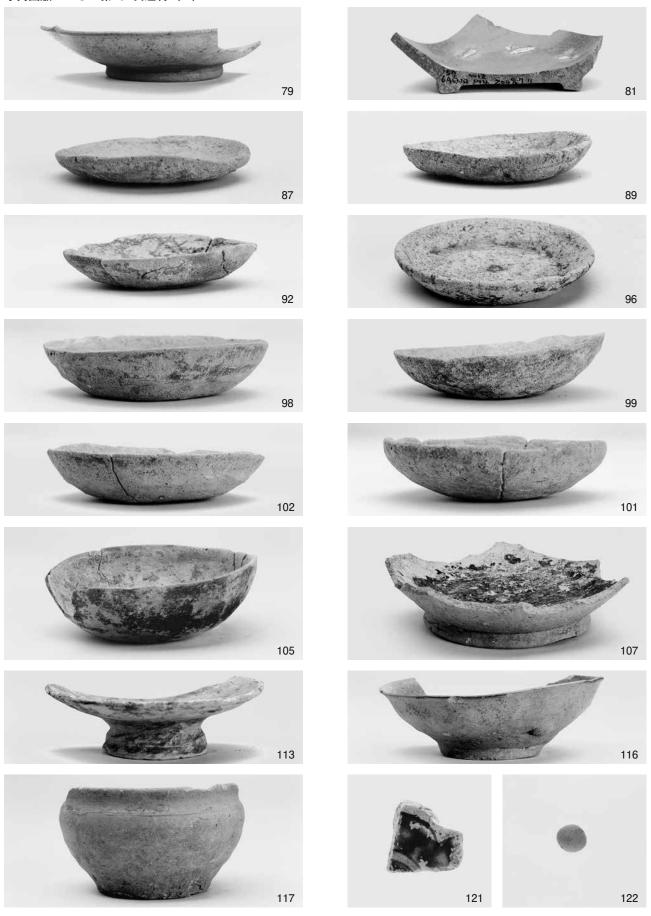


S B 9875(v13p9)(南から)

写真図版Ⅱ-7 第157次遺物(1)



写真図版Ⅱ-8 第157次遺物(2)



# Ⅲ 第158次調査

(6 R Q10 · Q11 御館地区)

#### 1 はじめに

第158次調査区は、史跡東部に位置する方格地割の中央部、御館地区に位置している。この調査区は、古代伊勢道(奈良古道)および方格地割の南北区画道路が通る部分にあたる。調査区南側では、第55次調査が行われ、平安時代初期~後期の掘立柱建物が多数確認されている。また、農道を挟んだ東側では第28次調査が行われており、古代伊勢道および掘立柱建物などを確認している。第158次調査では、古代伊勢道や区画道路の状況および御館地区の建物配置状況を確認する目的で調査を実施した。

調査は平成20年8月18日から平成20年12月27日まで実施し、調査面積は525㎡であった。

## 2 地形と層位

第158次調査を実施した御館地区は、史跡の保存管理区分の第一種保存地区に含まれ、周辺は明和町の公有地や畑地となっている。調査区は標高10.7m程度の平坦地であるが、北へ向かって緩やかに傾斜しており、調査区の北5m程の所には、浅い谷状の低地部が存在する。

基本層位は、灰褐色砂質土の表土下に黒褐色砂質 土が堆積しており、表土下0.2~0.4mほどで明黄褐 色粘土の地山面を確認した。

今回の調査では、遺構の確認を目的としている事から、遺構は検出面から5cmほどの掘削に留めたが、性格が不明な土坑などについては、必要に応じて完掘もしくはトレンチを設定して掘削した。

## 3 遺構

この調査では、掘立柱建物3棟および溝14条、土 坑42基を確認した。調査区の東側は、近世以降の撹 乱を受けており、底面で僅かに遺構の痕跡を確認し たのみである。

#### (1) 斎宮 I-4期以前の遺構

SF10000 調査区北半部を北西から南東方向に延

びる道路遺構で、古代伊勢道(奈良古道)にあたる。 この南北両側溝については、これまで調査次によっ て複数の遺構番号が与えられていたため、ここでは 古代伊勢道をSF10000とし、北側溝SD10001、南 側溝をSD10002とした。伊勢道の軸方位は概ねE 15°Sで、道路幅は側溝内側で8.1m前後、側溝外 側で9.5m前後を測る。SD10001・10002はともに 断面が逆台形を呈し、埋土は黒色砂質シルト土で ある。SD10002が幅0.5mでほぼ直線であるのに対 し、S D10001は幅0.5~1.0mで南側溝に比べ浅く、 調査区中央部で途切れる。深さは0.15m程度が残る のみで、道路の上部は削平されているものと考えら れる。遺物は土師器の小片が僅かに出土したのみで 時期決定は出来ないが、近年では第154次調査区で 確認した古代伊勢道南側溝SD0170がI-3期の内 に埋没しており、埋土の色調も近いことから、SD 10001・10002もこれとほぼ同時期に埋没したものと 考えられる。

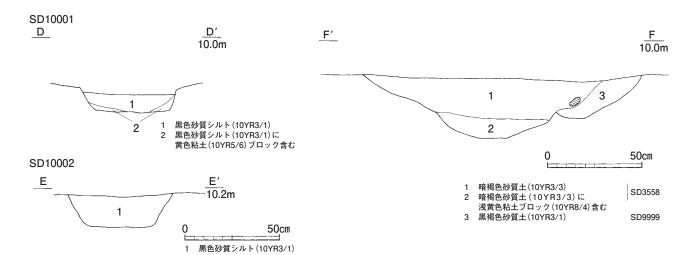
S D9999 調査区中央北端で確認した南北溝で、S D3558に先行する。幅 $0.4 \sim 0.5$ mで、深さは0.2m 程度残る。断面はU字形を呈し、埋土は黒褐色砂質土である。土師器杯・甕、須恵器杯(1)等が出土しており、 $I-4 \sim II-1$ 期の遺構と考えられる。やや蛇行するものの、S D3558以前の南北区画道路の西側溝の可能性が考えられる。

#### (2) 斎宮Ⅱ-1~2期の遺構

SB0999 調査区南西隅で掘立柱建物の柱掘形2個を検出したもので、第55次調査区では建物南半部が確認されている。桁行5間×梁行2間の東西棟で、棟方位はN0°。柱間は桁行2.4m、梁行2.6mを測る。柱掘形は一辺0.5m程度の隅丸方形を呈し、直径0.2~0.3mの柱痕跡も確認している。出土遺物はいずれも小片であり時期は決定できないが、第55次調査の出土遺物よりⅡ-2期頃と考えられる。建物の東側柱通りの北の延長線上には、一辺0.6m程度の隅丸方形を呈する柱掘形があり、北面庇を持つ可能性もある。その場合、庇の出は約2.4mである。

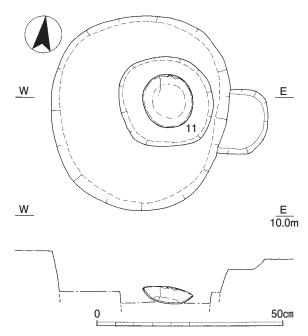


第 II - 1 図 第158次調査 第158・28・55次調査遺構図 (1:200)



第 II - 2 図 第158次調査 S D10001·10002 西壁土層断面図 (1:20)

第Ⅲ-3図 第158次調査 SD3558·9999北壁土層断面図(1:20)



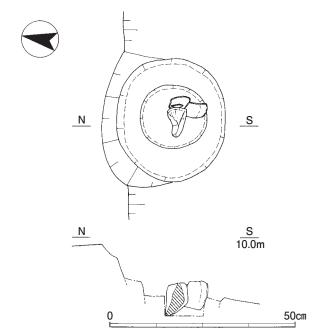
第Ⅲ-4図 第158次調査 S B 9951 (£23p5) 平面・ 立面図(1:10)

**S K 9982** 調査区南西隅に位置し、長径 2 mの楕円形を呈する土坑で、深さは0.15 m程度と浅い。土師器杯・椀・皿・甕、須恵器杯などが出土しており、II-1期のものである。

S K 9989 調査区北西部に位置する土坑で、長径1.3 m×短径0.9mを測る。不定形を呈しており、複数の土坑が重複していたと考えられる。土師器杯・皿・甕・把手片、須恵器杯蓋などが出土しており、Ⅱ-1期のものである。

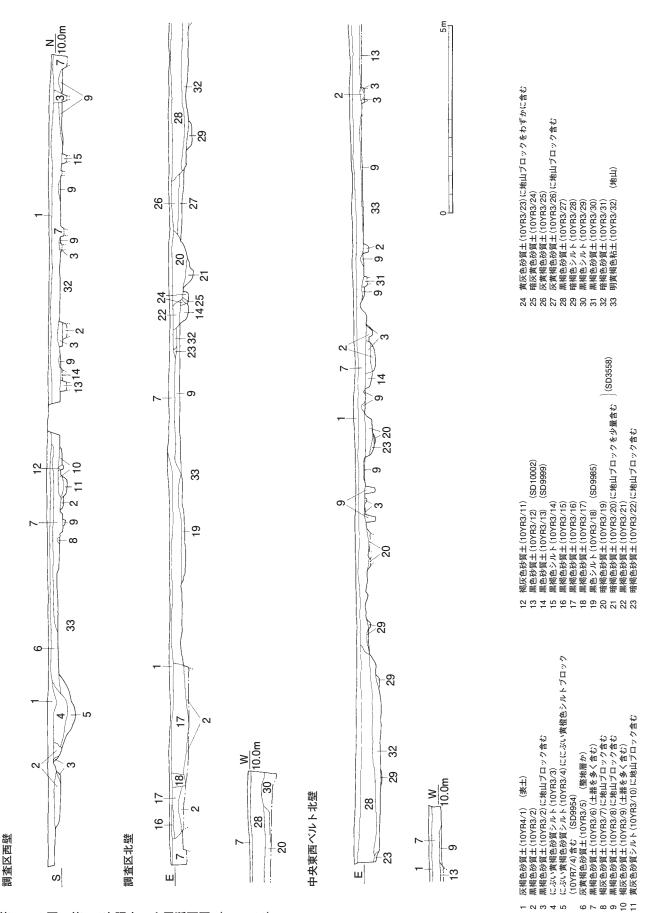
#### (3) 斎宮Ⅱ-3~4期の遺構

SB9951 調査区西部に位置する掘立柱建物で、 西側調査区外へ続く。桁行3間以上×梁行3間の総



第Ⅲ-5図 第158次調査 S B 9950 (m25p7) 平面・ 立面図 (1:10)

柱あるいは北面庇付建物になるものと考えられる。 棟方位はN1°Eで、柱間は桁行・梁行ともに2.1 mを測る。土師器杯(11)・椀・甕、須恵器甕などが出土している。このうちⅡ-4期に比定される(11)は、柱痕跡直上から正位で出土しており、建物廃絶に伴う祭祀に使用され、SB9951はⅡ-4期以前に建てられたと考えられる(図Ⅲ-4)。なお、北西隅の柱掘形からはⅢ期の遺物がまとまって出土しているが、他の柱掘形と比べて遺物の出土量が著しく多いことや土師器杯(11)の出土状況から考えて、北西隅の柱掘形はこの建物に伴うものではなく、後世のものが重複すると判断した。



第Ⅲ-6図 第158次調査 土層断面図 (1:100)

S K 9966 調査区北西隅に位置し、S D 10001より 後出する土坑である。北側調査区外へ続き、直径2.3 mの半円部分を確認した。土師器杯 (2)・椀 (3)・ 皿 (4)・甕、灰釉陶器椀等が出土しており、Ⅱ -3期のものと考えられる。

**S K 9970・9986・9987** S K 9970は調査区中央部に位置し、長径  $3 \text{ m} \times$  短径  $2 \text{ m} \approx$  測る土坑で、底部で S K 9986・S K 9987を確認しており、複数の土坑の上層部であると考えられる。土師器杯( $6 \sim 8$ )・三足盤( $9 \cdot 10$ )・甕等が出土しており、 $II - 3 \sim 4$ 期に相当する。

#### (4) 斎宮Ⅲ期の遺構

**SB9950** 調査区西部に位置する掘立柱建物で、 桁行3間×梁行2間の南北棟である。柱間は桁行2.4 m、梁行2.1mを測り、棟方位はN9°E。柱掘形は直径0.3~0.4mの円形で、直径0.2m程の柱痕跡を確認した。柱掘形から土師器杯・皿・台付皿・甕、 灰釉陶器椀などが出土しており、 $\Pi - 1 \sim 2$ 期のものと考えられる。また、柱掘形の1つでは、柱痕跡から土師器杯と石が出土しており、建物廃絶時に祭祀が行われた可能性が考えられる(図 $\Pi - 5$ )。

S D9959 調査区北部に位置する溝で、幅0.3m・深さ0.1m程を測る。溝方位はN1°Eで、土師器皿や甕、須恵器甕、灰釉陶器皿(26)・椀(27)等が出土している。Ⅲ期以降の遺構と考えられる。

S D9961 調査区北東部に位置する溝で、上部は近世の撹乱により削平されており、深さ0.1m程度しか残っていなかった。土師器皿 (28・29)、ロクロ土師器皿、須恵器甕、灰釉陶器椀等が出土しており、Ⅲ-2期頃の遺構と考えられる。

S K 9965 調査区中央部に位置する土坑で、直径0.9 m程度の楕円形を呈する。深さ0.2mで、土師器杯・甕 (25)・甑、ロクロ土師器皿・台付皿、須恵器杯・甕、灰釉陶器等が出土している。Ⅲ − 1 ~ 2 期の遺構と考えられる。

S K9967 調査区北西隅に位置し、東西1.8m× 南北2.5mを測る土坑である。底部でS K10003・ 10009を確認していることから、複数の土坑が重なっ ている可能性が高い。土師器杯・皿(23)・台付皿・甕、 ロクロ土師器皿、須恵器壺、灰釉陶器椀(24)等が 出土している。Ⅲ-2期の遺構と考えられるが、Ⅱ -3~4期の遺物も多数混在している。

**S K9990** 調査区北西隅に位置する土坑で、遺構はは調査区外に伸びる。土師器杯( $12\cdot13$ )・皿( $14\sim18$ )・甕 ( $19\sim22$ )等がまとまって出土している。いずれも $\Pi-3$ 期に相当するものである。

#### (5)鎌倉時代以降の遺構

SD3558 調査区中央部を南北に延びる溝で、幅 0.8~1.3m、深さ0.3mを測る。土師器や須恵器、灰釉陶器、山茶椀(31・32)・山皿(30)、白磁(33・34)等が出土している。溝底部より山茶椀が出土していることから、埋没は鎌倉時代と考えられるが、Ⅱ-3~4期およびⅢ期の遺物も見られることから、何度か再掘削が行われた可能性がある。南北区画道路の西側側溝を踏襲した溝とも考えられる。

S D9954 調査区南部を東西に延びる溝で、S D 3558より新しい。幅1.9~2.3m・深さ0.4mを測る。 土師器杯・台付皿・甕、ロクロ土師器皿、須恵器壺、 灰釉陶器椀、白磁椀(35)、山茶椀などが出土して おり、埋没時期は鎌倉後期以降と考えられる。

(新名 強)

## 4 出土遺物

第158次調査では、一次整理の段階で整理箱49箱 分の遺物が出土している。

#### (1) I-4期以前の遺物

**S D9999出土遺物** (1) 土師器杯・甕、須恵器杯 等が出土している。

須恵器杯B(1)は、器高に対して口径が広くなる。口縁部は外傾して開き、底部と口縁部との境に幅広の角高台がつく。

#### (2) Ⅱ-3~4期の遺物

S K 9966出土遺物  $(2 \sim 4)$  土師器杯・椀・皿・甕、 灰釉陶器椀等が出土している。

土師器杯A (2) は、口縁部の1/2をヨコナデする。椀A (3) は口径17.3cmの大型品で、口縁部が大きく開く。皿A (4) は、断面形が孤状になる。 II - 3 期に相当する。

**SK9986出土遺物**(5) 土師器杯・椀、須恵器甕 等が出土している。

土師器杯A(5)は、口縁部の約1/2をヨコナデし、外反する。II-4期に相当する。

遺構名	調査時	ピット番号	時期	規模	柱間寸法	主軸	方位	備考	
退佣石	遺構名	※( )はグリッド番号	中寸均	間 $(m) \times$ 間 $(m)$	(m)	土粗	(N規準)	7/11/5	
SB0999	建物3	(ℓ2)P1·P6	Ⅱ -2	$5(12.0) \times 2(5.2)$	(桁行)2.4 (梁行)2.6	東西	N0°	北側庇付の可能性あり	
SB9950	建物1	(\ell 24) P1/(\ell 25) P2/(m24) P1 \cdot P8/(m25) P2 \cdot P3 \cdot P7	<b>Ⅲ</b> −1~2	$3(7.2) \times 2(4.2)$	(桁行)2.4 (梁行)2.1	南北	N9° E		
SB9951	建物 2	(k23)P4/(k24)P1/(ℓ23) P4·P5·P6·P15/(ℓ24)P2·P4	II -4	$-(4.2) \times 3(6.3)$	(桁行)2.1 (梁行)2.1	東西	N1°E	総柱建物	

### 第Ⅲ-1表 第158次調査 掘立柱建物一覧表

遺構名	調査時 遺構名	グリッド	時期	出土遺物	備考
SD3558	溝4	o22 - p2	鎌倉前期	土師器甕・椀・皿・高杯・台付皿、ロクロ土師器皿、 須恵器杯B・甕、白磁椀、灰釉陶器椀、山茶椀・皿	区画道路西側溝
SD9954	溝2	k1-p1	鎌倉後期~	土師器杯・台付皿・甕、ロクロ土師器皿、須恵器 壺、灰釉陶器椀、白磁椀、山茶椀	SD3558より新
SD9955	溝3	k1-m2	不明	土師器	
SD9956	溝5	k2-o2	不明	土師器	
SD9957	溝6	ℓ 25	不明	土師器	
SD9958	溝7	m22	<b>Ⅲ</b> −2	土師器皿	SD9959より新
SD9959	溝8	m22 - o22	∭~	土師器皿・台付皿・甕、ロクロ土師器皿、須恵器   甕、灰釉陶器椀・皿	SD10001より新
SD9960	溝10	p22 - p23	Ⅲ -3	土師器皿、ロクロ土師器皿、灰釉陶器椀、山茶椀	
SD9961	溝12	p22 – p24	<b>Ⅲ</b> −2 ?	土師器皿、ロクロ土師器皿、須恵器甕、灰釉陶器 椀	
SD9962	溝14	g22 – g25	不明	土師器、須恵器甕	
SD9963	溝15	n2 – o2	II ?	土師器	
SK9964	土坑1	k23 − ℓ23	Π ;	土師器杯・皿・甕・把手片、灰釉陶器椀	
SK9965	土坑2	m24	<b>I</b> −1~2	土師器杯・甕・甑、ロクロ土師器皿台付皿、須恵 器皿・甕、灰釉陶器	
SK9966	土坑3	m22	II -3	土師器杯A・椀A・皿A・甕、灰釉陶器椀	
SK9967	土坑4	l 22	Ⅲ -2	土師器杯・皿・台付皿・甕、ロクロ土師器皿、須 恵器壺、灰釉陶器椀	
SK9968	土坑6	m25	Ⅲ -1	土師器皿・高杯・甕、須恵器甕	
SK9969	土坑7	ℓ2	不明	土師器	
SK9970	土坑8	n23 – n24	Ⅱ -3~4	土師器杯・三足盤・甕	SK9986・SK9987の上層
SK9971	土坑9	m25 - 023	Ⅲ -1	土師器椀・甕、須恵器甕	
SK9972	土坑10	p25	Ⅲ -2?	ロクロ土師器皿、灰釉陶器壺	
SK9973	土坑11	p1-p2	Ⅲ-1~	土師器杯・台付皿・甕、須恵器杯・壺	複数遺構重複
SK9974	土坑12	r2	不明	須恵器	
SK9976	土坑14	o1	不明	土師器	
SK9977	土坑15	n24	Π ?	土師器、須恵器	
SK9978	土坑16	n24	Π ;	土師器	
SK9979	土坑17	n24	Ⅱ -3~4	土師器、須恵器甕、灰釉陶器椀	

第Ⅲ-2表 第158次調査 遺構一覧表 (1)

遺構名	調査時 遺構名	グリッド	時期	出土遺物	備考
SK9980	土坑18	n24	II ?	土師器、須恵器	
SK9981	土坑19	p25	Ⅲ ?	土師器杯・皿	
SK9982	土坑20	ℓ1-k1	Ⅱ -1	土師器杯・椀・皿・甕、須恵器杯	
SK9983	土坑21	n24 – o24	不明	土師器甕、須恵器杯	
SK9984	土坑22	k24	II ?	土師器甕、灰釉陶器椀	
SK9985	土坑23	l 22	Ⅱ -3	土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器甕	
SK9986	土坑24	o23	Ⅱ - 3 ~ Ⅲ - 1	土師器杯・椀、須恵器甕	SK9970の底部
SK9987	土坑25	n24	Π ?	土師器	SK9970の底部
SK9988	土坑26	o24 – n24	II	土師器杯、須恵器甕、灰釉陶器	
SK9989	土坑27	ℓ22	Ⅱ -1	土師器杯・皿・甕・把手、須恵器杯蓋	
SK9990	土坑28	m22	<b>I</b> I − 3	土師器杯・皿・甕	
SK9991	土坑29	p23 - p24	鎌倉前期	土師器皿・甕、山茶椀	
SK9992	土坑30	023	II	土師器鍋、須恵器	
SK9994	土坑32	n24	Ⅱ -3~4	土師器杯	SK9988の底部
SK9995	土坑33	n24 – o24	Π ;	土師器	
SK9996	土坑34	m22	Ⅱ ?	土師器杯・甕、須恵器壺	SD10001より新
SK9997	土坑35	ℓ22 – ℓ23	Π ?	土師器杯・甕	
SK9998	土坑36	ℓ22	<b>Ⅲ</b> −2	土師器椀・皿・甕、灰釉陶器椀	SK9967の底部
SD9999	溝11	022 - 023	I -4~ II -1	土師器杯・甕・台付皿、須恵器杯	SD3558より古 区画道路西側側溝?
SF10000	-	k22 – p25	I -3	_	古代伊勢道
SD10001	溝13	l 22 - o22	I -3	土師器	古代伊勢道北側溝
SD10002	溝9	k24 – p25	I -3	土師器	古代伊勢道南側溝
SK10003	土坑37	l 22	Ш	土師器、灰釉陶器皿	SK9967の底部
SK10004	土坑38	n23	Π ;	土師器甕、須恵器	
SK10005	土坑39	o23	$\mathbb{I} \sim \mathbb{I}$	土師器	
SK10006	土坑40	n24	不明	土師器、須恵器甕、灰釉陶器	
SK10007	土坑41	n24	不明	土師器	
SK10008	土坑42	m22	<b>Ⅲ</b> −3~?	土師器杯・甕	SK9990の底部
SK10009	土坑43	ℓ22	${\mathbb H}$	土師器椀、灰釉陶器椀	SK9967の底部
SK10010	土坑44	r22	Ⅱ -3~4	土師器甕	
SK10011	土坑45	ℓ 22	Π ?	土師器	

第Ⅲ-3表 第158次調査 遺構一覧表 (2)

**S K 9970出土遺物**  $(6 \sim 10)$  土師器杯・三足盤・ 甕等が出土している。

土師器杯A( $6\sim8$ )は、口縁部が上方へ伸びる(6)と外反する( $7\cdot8$ )がある。三足盤(9)は、全体の 2/5程が残存する。底部外面は荒い不定方向のハケを施す。内傾し端部を外側に屈曲させた脚部は、ヘラケズリで成形する。(10)も三足盤の脚部で、(9)と同一個体の可能性が高い。II-4期に相当する。

**SB9951出土遺物**(11) 土師器杯・椀・甕、須恵器甕が出土している。

土師器椀A(11)は、口縁端部がわずかに外反し、 底面中央部が上に持ち上がる。体部外面には全体に 指頭圧痕が見られる。Ⅱ-4期に相当する。

#### (3) Ⅲ期の遺物

S K 9967出土遺物 (23·24) 土師器杯・皿・台付皿・ 甕、ロクロ土師器皿、須恵器壺、灰釉陶器椀等が出 土している。

土師器皿A (23) は、肥厚した口縁端部をヨコナデする。灰釉陶器椀 (24) は、大きく開いた口縁部の端部がやや肥厚し外反する。Ⅲ - 2期に相当する。

S K 9965出土遺物 (25) 土師器杯・甕・甑、ロクロ土師器皿・台付皿、須恵器杯・甕、灰釉陶器等が出土している。Ⅲ-2期のものと考えられる。

土師器甕(25)は、口縁端部を内側に折り返す。

S D9961出土遺物 (28・29) 土師器皿、ロクロ土 師器皿、須恵器甕、灰釉陶器椀等が出土している。

土師器皿 (28・29) は、断面形が弧状をなすもので、29は全体に器壁が厚い。Ⅲ - 2期に相当する。

**S K 9990出土遺物** (12 ~ 22) 土師器杯・皿・甕 等が出土している。Ⅲ - 3期のものと考えられる。

杯( $12 \cdot 13$ )は、口縁部が上方にのびる(12)と肥厚した口縁部をヨコナデし外側に面をもつ(13)がある。皿( $14 \sim 18$ )は口縁部をヨコナデし、外側に面をもつ( $14 \sim 17$ )と、底部からそのまま開く(18)がある。甕( $19 \sim 22$ )は短い口縁部の端部を内側に折り返す。外面にはススが付着し、被熱による変色が見られる。

**SD9959出土遺物** (26・27) 土師器皿・台付皿・ 甕、ロクロ土師器皿、須恵器甕、灰釉陶器椀・皿等 が出土し、Ⅲ-3期までのものと考えられる。 灰釉陶器の皿(26)と椀(27)を図示した。

#### (4)鎌倉時代以降の遺物

S D3558出土遺物 (30 ~ 34) 土師器椀・皿・台付皿・高杯・甕、ロクロ土師器皿、須恵器杯・甕、 灰釉陶器椀・山茶椀・山皿、白磁等が出土している。

山茶椀(31・32)は、高台の断面形が(31)は三角形、(32)が逆台形になる。山皿(30)は、口縁端部が肥厚し、丸くおさめられる。(33・34)は白磁椀で、口縁部の断面が三角形に近い玉縁状である。

#### (5) その他の遺物

遺物包含層やピットから出土したもののうち、特殊なもの  $(36 \sim 39)$  を取り上げる。

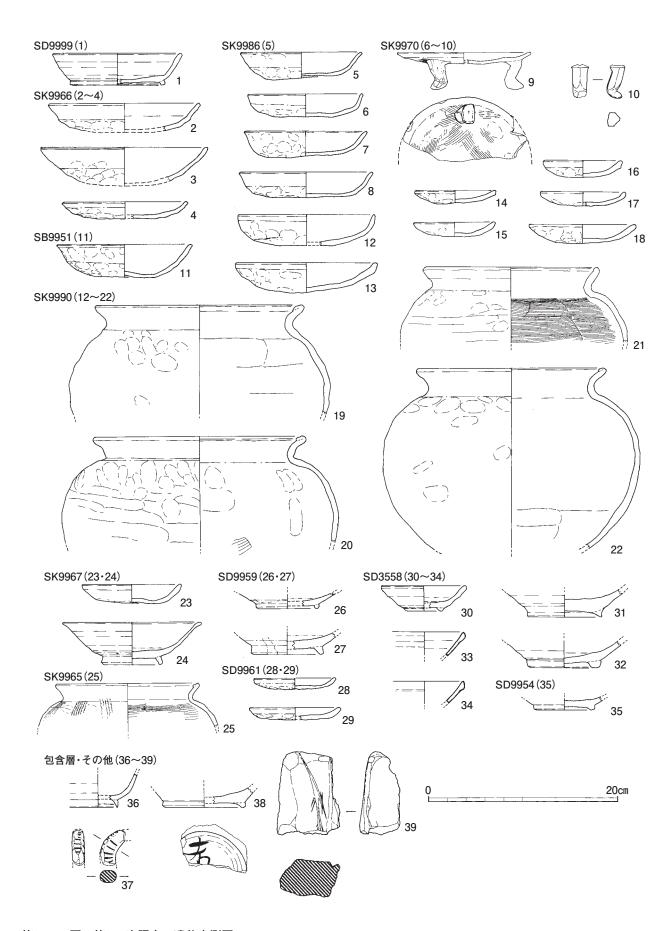
(36) は、緑釉陶器椀で、全面に施釉し、高台は断面二等辺三角形である。(37) は、断面が楕円形で湾曲する表面に刻み目がある緑釉陶器で、羊形の角部分であろうか。二彩以上である可能性も考えられる。墨書土器(38)は、山茶椀の底部外面に墨書される。「左」の可能性もあるが、詳しい判読は不明。(39)は砂岩性の砥石で、一面のみに研磨痕が見られる。(角正 芳浩)

## 5 まとめ

今回の調査では、古代伊勢道の南北両側溝および 南北区道路の西側溝を踏襲する可能性のある溝、掘 立柱建物 3 棟等を確認した。

古代伊勢道は、南北側溝間の芯々距離が8.85m 前後であることから、道路が25大尺(1大尺=約 35.5cm)の規格でつくられていたことが窺える。

南北区画道路について、溝SD3558は、第28次調査で確認されている溝SD1328の西12m程の位置にあり、それぞれ南北区画道路の側溝を踏襲する溝と考えられる。また、SD3558の西側では多数のピット群が確認されている。これらのピットは、楕円形や方形、不定形など様々であり、建物や柵列になるような規格性もないことから、道路に沿って区画内に植えられた植栽痕跡の可能性が高いと考えられる。ピット内からは、主にⅡ~Ⅲ期の土器片が出土しており、長期間植栽が行われていたものと考えられよう。 (新名 強)



第Ⅲ-7図 第158次調査 遺物実測図

番号	器種	器形	地区遺構	法量	(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	登録 番号
1	須恵器	杯B	SD9999	口径 底径 器高	9.2	外面:ナデ 内面:ナデ 底部:ケズリ、貼付高台	密	良	暗オリーブ 灰2.5GY4/1	口縁部 3/12		006 – 10
2	土師器	杯A	SK9966	口径	15.6	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 2/12		001 - 04
3	土師器	椀A	SK9966	口径		外面: ナデ、オサエ後ナデ 内面: ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 3/12		001 - 03
4	土師器	ШA	SK9966	口径 器高	12.8	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 2/12		001 - 05
5	土師器	杯A	SK9986	口径器高	12.5	内面:	密	良	橙7.5YR6/6	口縁部 9/12		002 - 06
6	土師器	杯A	SK9970	口径器高	11.9	外面: ナデ、オサエ後ナデ 内面: ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 10/12		002 - 03
7	土師器	杯A	SK9970	口径器高	12.7	外面: ナデ、オサエ後ナデ 内面: ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 7/12		002 - 02
8	土師器	杯A		口径器高	13.7	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 7/12		002 - 01
9	土師器	三足盤	SK9970	口径器高	13.8	外面:ナデ、オサエ、ケズリ 内面:ヨコナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	口縁部 4/12		002 - 04
10	土師器	三足盤	SK9970	-	-	外面: ナデ、オサエ、ケズリ 内面: ヨコナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	-	9と同一個体?	002 - 04
11	土師器	杯A	SB9951	口径 器高		外面: ナデ、オサエ後ナデ 内面: ヨコナデ	密	良	橙7.5YR7/6	完形		007 - 02
12	土師器	杯	SK9990	口径器高	16.2	内面: ココテァ 外面: ナデ、オサエ後ナデ 内面: ナデ	密	良	外面:橙7.5YR7/6  内面:灰黄褐10YR6/2	口縁部 7/12	外面に粘土接合痕	004 - 02
13	土師器	杯	GIZOGGG	口径器高	14.7 3.2	外面:ナデ、オサエ後ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	口縁部 9/12	外面にスス付着	004 - 01
14	土師器	小皿	SK9990	口径 器高	8.3 1.4	外面:ナデ、オサエ後ナデ	やや 粗	やや 不良	灰白10YR8/1	完形		004 - 06
15	土師器	小皿	SK9990	口径器高	8.4 1.5	外面:ナデ、オサエ後ナデ	密	やや不良	橙7.5YR7/6	口縁部 7/12		004 - 07
16	土師器	小皿		口径器高	7.9	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	完形	外面に粘土接合痕	004 - 08
17	土師器	小皿	SK9990	口径 器高	8.7 1.5	摩耗により不明	やや 粗	やや 不良	灰白10YR8/2	口縁部 8/12		004 - 05
18	土師器	小皿	SK9990	口径器高	11.0 2.0	外面:ナデ、オサエ後ナデ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 9/12		004 - 04
19	土師器	甕	SK9990	口径胴径	21.4	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:板ナデ	密	良	灰白10YR8/2	口縁部 6/12	外面にスス付着	005 - 01
20	土師器	甕	SK9990	旧径 旧径	21.7 29.0	外面:ナデ、オサエ後ナデ	密	良	灰白10YR8/2	完形	外面にスス付着	004 - 09
21	土師器	甕	SK9990	旧径 旧径	17.8	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ヨコハケ	密	良	にぶい黄橙10YR7/3	完形	外面にスス付着	004 - 10
22	土師器	甕	SK9990	口径胴径	9.4	外面: ナデ、オサエ後ナデ、ヘラケズリ 内面: 板ナデ	密	良	淡黄2.5Y8/3	口縁部 4/12	外面にスス付着	005 - 02
23	土師器	ΠA	SK9967	口径器高	10.2	<u>外面:</u> オサエ後ナデ	やや 粗	やや 不良	浅黄橙10YR8/3	口縁部 9/12		001 - 10
24	灰釉陶器	椀		口器底径	14.2 4.5	外面: ナデ・ケズリ 内面: ナデ 底部: ケズリ、貼付高台	密	良	素地:灰白2.5Y7/1 釉:灰オリーブ5Y5/3	口縁部 6/12		001 - 09
25	土師器	甕	SK9965	口径	14.7	外面:ナデ、タテハケ 内面:ヨコハケ	密	良	灰白10YR8/2	口縁部 5/12	外面にスス付着 粘土接合痕	001 - 01
26	灰釉陶器	Ш	SD9959	底径	6.0	外面: ヘラケズリ 内面: ナデ	密	良	素地:灰黄2.5Y7/2 釉:灰オリーブ5Y5/3	底部 4/12	711 - 13 11 10	006 - 09
27	灰釉陶器	椀	SD9959	底径	7.0	内外面:ナデ 高台:貼付ナデ	密	良	素地:灰黄2.5Y7/2 釉:灰オリーブ5Y5/3	底部 2/12		006-08
28	土師器	小皿	SD9961	口径 器高	8.3 1.2	外面:ナデ、オサエ後ナデ	密	やや 不良	浅黄橙10YR8/4	完形		006-11
29	土師器	小皿		口径器高	9.3	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	にぶい黄橙10YR7/4	口縁部 3/12		006 – 12
30	陶器	Ⅲ (山皿)	SD3558	口径	8.7 3.6 2.7	外面: ナデ 底部: 糸切、貼付高台	密	良	灰白10YR8/1	口縁部 3/12		006 - 07
31	陶器	椀 (山茶椀)		底径	7.5	外面: ナデ 底部: 糸切、貼付高台	密	良	灰白2.5Y7/1	底部 6/12	高台端部に籾殻痕	006-05
32	陶器	椀 (山茶椀)	SD3558	底径	7.0	外面: ナデ 底部: 糸切、貼付高台	密	良	灰白2.5Y7/1	底部 5/12	内面に灰化物付着 高台に籾殻痕	006 - 06
33	白磁	椀	SD3558	-	_		密	良	素地:灰白2.5Y8/1 釉:灰白7.5Y7/1	小片	- Delante	006 - 04
34	白磁	椀	SD3558	-	-	-	密	良	素地:灰白2.5Y8/1 釉:灰白5Y7/2	小片		006 - 03
35	白磁	椀	SD9954	底径	5.6	外面:ケズリ	密	良	素地:灰白2.5Y8/1 釉:灰白2.5Y7/1	底部 4/12		006-02
36	緑釉陶器	椀	k22 p1	-	_	底部:貼付高台	密	良	素地:褐灰10Y R6/1 釉:オリーブ色816	高台 1/12	全面施釉	007 - 09
37	緑釉陶器	不明	包含層	幅厚さ	1.7 1.3	施釉·沈線	密	やや軟調	素地:灰白2.5 Y 8/1 緑釉: 山葵色849~抹茶色838 白釉: ねこやなぎ色825~蒸栗色801	小片	羊形角? 二彩以上?	007 - 10
38	陶器	椀 (山茶椀)	m24 p4柱痕	底径	8.0	外面:ナデ 底部:糸切、貼付高台	密	良	灰白2.5 Y 7/1	底部 4/12	底部に墨書「左?」 高台に籾殻痕	007 - 08
39	石製品	砥石	k23 p3	厚さ	4.4	- 412404141414	砂岩	_	褐灰10YR5/1	-	重量:249 g	007 - 07

第Ⅲ-4表 第158次調査 遺物観察表

写真図版Ⅲ-1 第158次遺構(1)

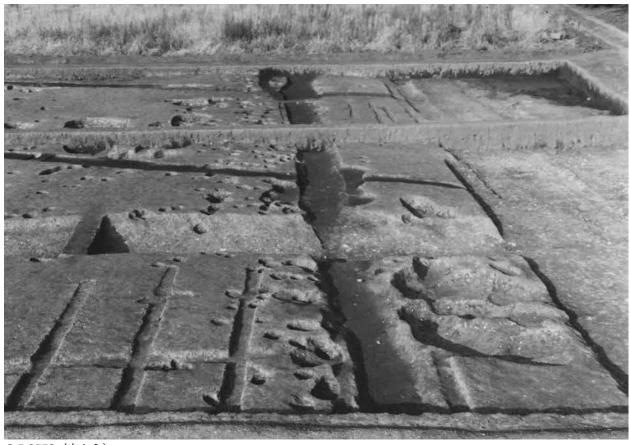


調査区全景(東から)



調査区全景(南から)

写真図版Ⅲ-2 第158次遺構 (2)



SD3558(南から)

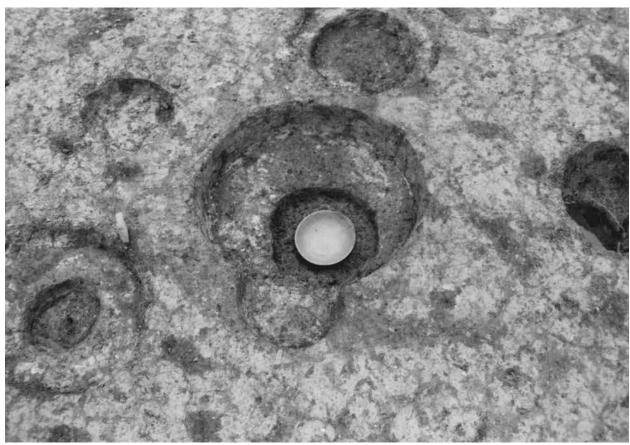


古代伊勢道SF10000(東から)

写真図版Ⅲ-3 第158次遺構(3)

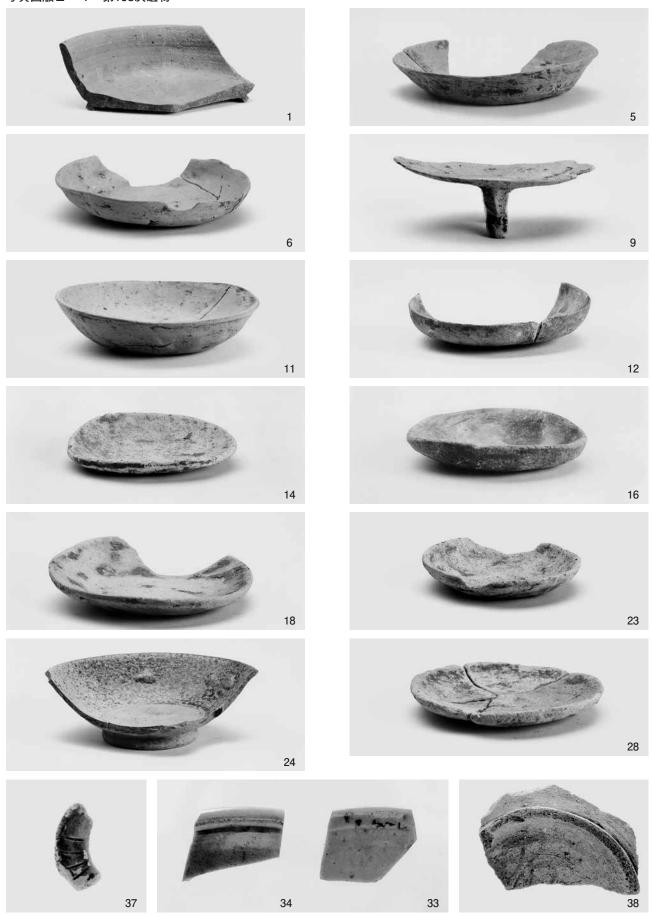


SB0999・SB9950 (南から)



S B 9951 (*l* 23p5) (東から)

写真図版Ⅲ-4 第158次遺物



# IV 第160次調査

(6AU8 東加座地区)

#### 1 はじめに

第160次調査区は、史跡東部に位置する方格地割の北東部、東加座北①・北②区画に位置している。この部分は、方格地割の北辺道路と南北方向の区画道路が接続する重要な部分である。調査区東側では第66・79次調査が行われており、北辺道路南側溝が確認されているが、西加座北区画以西では、区画内の南北幅がおよそ410小尺であるのに対し、東加座北②区画では南北幅が400小尺である可能性が指摘されている(1)。今回の調査では、北辺道路と区画道路の交差点部分を確認し、東加座北①・北②区画での北辺道路の実態を解明する目的で実施した。

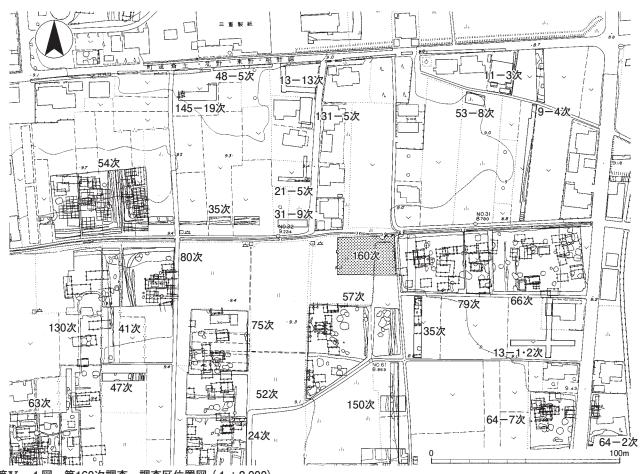
調査は平成20年7月18日から平成21年2月27日まで実施し、調査面積は602㎡である。

## 2 地形と層位

第160次調査を実施した方格地割内の東加座北① 区画・北②区画は、史跡の保存管理区分の第一種保存地区に属し、明和町公有地や畑地となっており、標高9.5~9.7m程の平坦地が広がっている。調査区北側には「前沖溝 | と呼ばれる水路が東へと流れる。

基本層位は、褐灰色砂質土の表土下ににぶい黄褐色砂質土が堆積しており、表土下0.2~0.3mほどで明黄褐色粘土の地山面を確認し、遺構は地山面で検出した。

今回の調査では、遺構の確認を目的としている事から、遺構は基本的に完掘せず、検出面から5cmほどの掘削に留め、必要な遺構のみ完掘もしくはトレンチを設定して調査を行った。



第Ⅳ-1図 第160次調査 調査区位置図(1:2,000)

## 3 遺構

第160次調査では、掘立柱建物1棟、溝8条、土坑11基を確認した。

#### (1) Ⅱ期の遺構

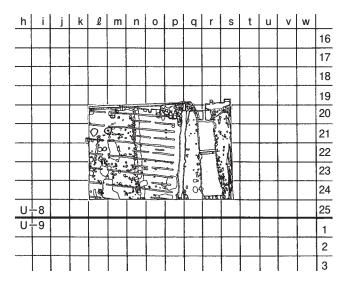
SD3705 調査区中央部を南北に延びる溝で、南北方向の区画道路の西側溝にあたる。幅 $0.7 \sim 1.1$  m、深さ0.25mを測る。断面は南端でしか確認していないが逆台形を呈する。埋土は黒褐色砂質土で、断面観察より掘り直された痕跡も窺える。出土遺物は、土師器杯や須恵器甕・壺などが出土しているが、いずれも小片であった。SD3705は第 $57\cdot150$ 次調査でも確認されており、 $\Pi-1\sim2$ 期の遺構と考えられる。

SB10030 調査区の西端中央部で検出した東西1間以上×南北2間の東西棟の掘立柱建物で、西側調査区外へ続く。柱間は桁行・梁行とも2.1mを測り、棟方向はN4°Wである。柱掘形は直径1m程の楕円形や長方形を呈している。柱痕跡については、ほとんどの柱穴において、明確には判別できなかった。柱掘形より土師器皿(2)・甕(3)、須恵器甕(4)、志摩式製塩土器が出土しており、Ⅱ-2期のものと考えられる。

**SD10020** 調査区北端を東西に延びる溝で、SD4355やSD10015の底部で確認した。北側調査区外へ続くため幅は不明であるが、断面は箱状で埋土は 黄灰色や褐灰色シルトである。方位はN2~3°Wであるが、溝の全様が明らかではないため、正確な方位は不明。調査区西側では、SD10015とほぼ重なっている。土師器片が僅かに出土しているのみであるが、II期に掘削されたものと考えられる。

S D 10014 調査区南東部、S D 10012の東端底部 で確認した溝で、幅0.7m程が残る。土師器甕が出 土し、Ⅱ期頃のものと考えられる。第57次調査で確 認されたS D 3736に対応する可能性も考えられる。

**SK10023** 調査区西側中央部にあり、SB10030の東側に位置する、長径 $4.5m \times 短径<math>1.7m$ 程の土坑である。出土遺物は土師器杯・盤・甕(1)、須恵器椀・甕等が出土しており、II-1期の遺構と考えられるが、I-4期の遺物も含まれており、複数の遺構が重複している可能性も考えられる。



第Ⅳ-2図 第160次調査 大地区・グリッド図 (1:800)

S K 10024 調査区西側中央部にあり、S B 10030 の南東に位置し、直径2m程の不整形な楕円形を呈する。土師器杯・皿(6)・甕・甑、須恵器杯蓋・甕・壺、志摩式製塩土器・土錘(7)等が出土しており、Ⅱ-2期の遺構と考えられる。

**SK10027** 調査区西側中央部にあり、SB10030 の南側に位置する土坑。直径1 mの楕円形を呈し、土師器杯・甕、灰釉陶器椀等が出土している。Ⅱ - 3期頃の遺構と考えられる。

#### (2) Ⅲ期の遺構

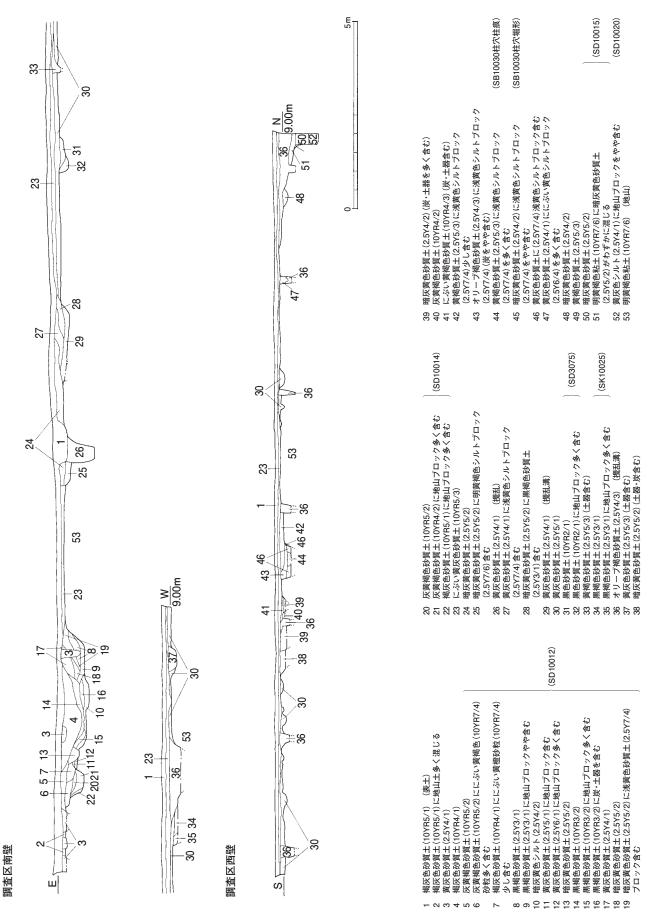
SK10025 調査区南西部に位置する土坑で、東西3.7m×南北4.3mを測る。土師器杯・皿(8・9)・甕(11)、ロクロ土師器皿、須恵器壺、灰釉陶器皿(10)、志摩式製塩土器などが出土している。遺物に時期幅が見られることから、複数の土坑が重複している可能性が考えられる。

**S K 10029** S K 10024の北東隅を切る土坑で直径  $0.7 \sim 0.8$ mの楕円形を呈する。土師器皿・甕、ロクロ土師器等が出土しており、III - 2期のものと考えられる。

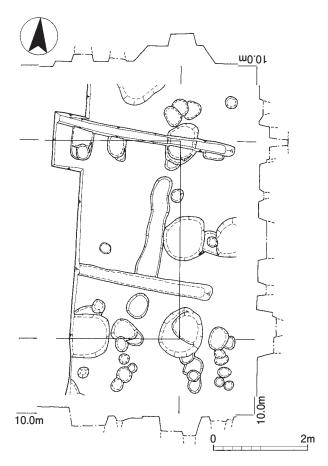
SK10018 調査区中央南部に位置する土坑で、長辺3.1m×短辺2.3mを測り、やや不整形な長方形を呈する。土師器杯・小皿(12・13)・甕、ロクロ土師器 皿、須恵器甕、灰釉陶器椀等が出土しており、Ⅲ-2~3期の遺構と考えられる。



第Ⅳ-3図 第160次調査 第160・79次調査遺構図 (1:200)



第11/100 第160次調査 土層断面図 (1:100)

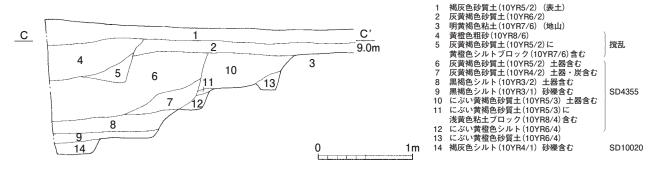


第IV-5図 第160次調査 SB10030平面・横断面図 (1:80)

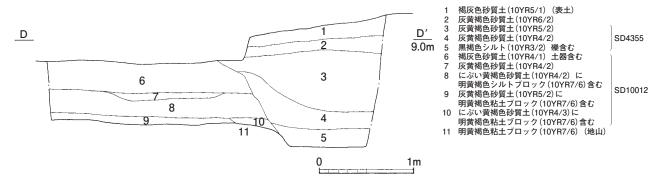
#### (3)鎌倉時代以降の遺構

SD10012 調査区東部を南北にはしる溝で、幅3.5 m~4.5m、深さ0.6mを測る。南北方向の区画道路東側溝にあたるもので、埋土断面より複数回の掘り直しが認められ、最終的には2.5m~3.5mの幅であったものと考えられる。土師器杯(18)・皿・台付皿(19)・台付椀・高杯・甕・甑、須恵器杯・壺・甕、緑釉陶器椀(20)、灰釉陶器椀、白磁椀、青磁椀、山茶椀等、多量の土器が出土している。山茶椀の藤澤編年(註2)第4型式のものが出土していることから埋没年代は鎌倉時代前期頃と考えられるが、Ⅱ−1~2期のものも多数含まれている。掘削年代が平安前期に遡るか、再掘削の段階で混入した可能性が考えられる。第57次調査では、東側溝としてSD1935・1936・3736があり、SD10012の底部がこれらの溝に対応する可能性も考えられる。

SD10015 調査区北端を東西に走る溝で、遺構は調査区外北側へ展開する。SD10020の上部に位置することから、SD10020が掘り直されたものと考えられる。出土遺物は土師器や須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、山茶椀などがあり、Ⅱ-4~Ⅲ期のものが多い。藤澤氏の山茶椀編年(2) 第5型式の山茶椀



第N-6図 第160次調査 S D4355・10020東壁土層断面図 (1:40)



第N-7図 第160次調査 S D 4355・10012西壁土層断面図 (1:40)

<b>連雄</b> 夕	調査時	ピット番号	時期	規模	柱間寸法	主軸	方位	備考
遺構名 遺	遺構名	※( )はグリッド番号	时势]	間(m)×間(m)	(m)	土粗	(N規準)	畑与
SB10030	建物 1	(k21)P1·P2/(ℓ21)P3·P4· P5·P6/(ℓ22)P6·P8·P9· P10·P11·P12	Ⅱ-2	1以上(2.1以上) ×2(4.2)	(桁行)2.1 (梁行)2.1	東西	N4° W	

第Ⅳ-1表 第160次調査 掘立柱建物一覧表

遺構名	調査時遺構名	グリッド	時期	出土遺物	備考
SD3705	溝 2	n18 – n24	Ⅱ -1~2	土師器杯、須恵器甕・壺	区画道路西側溝
SD4355	溝 3	q19-s20	中世~ 近世	土師器杯・皿・台付皿・高杯・鉢・甕・鍋、ロクロ土師器皿、須恵器杯・椀・甕・壺、志摩式製塩土器、緑釉陶器皿、灰釉陶器椀、白磁椀、青磁、山茶椀・皿、常滑甕	
SD10012	溝1	q20 - s24	鎌倉	土師器杯・皿・台付皿・台付椀・高杯・甕・甑、 須恵器杯・蓋・甕・壺、緑釉陶器椀、灰釉陶器 椀、白磁椀、青磁椀、山茶椀	区画道路東側溝
SD10013	溝 4	n22 – n23	$\mathbb{I} \sim$	土師器杯・椀、須恵器杯	
SD10014	溝 5	r24	Ι ?	土師器甕	
SD10015	溝 6	ℓ20 – p20 · p19 · q 19	Ⅲ~ 鎌倉前期	土師器椀・甕、須恵器甕・壺、灰釉陶器椀、緑釉 陶器椀、山茶椀・皿	
SD10017	溝 9	122	II ?	土師器甕	
SK10018	土坑 1	p23 – p24	<b>I</b> −2~3	土師器杯・皿・甕A、ロクロ土師器皿、須恵器 甕、灰釉陶器椀	
SK10019	土坑 2	o20 - p20	不明	土師器杯・甕・鍋、須恵器甕C、志摩式製塩土器	
SD10020	溝 7	ℓ20-s19	Ι ?	土師器	区画道路南側溝か
SK10021	土坑 5	m20	Ⅲ ?	土師器、灰釉陶器	
SK10022	土坑11	m20	Ⅲ ?	土師器、須恵器甕	
SK10023	土坑12	m22	Ⅱ -1	土師器杯・盤・甕、須恵器椀・甕	
SK10024	土坑13	l 22 – l 23	II -2	土師器杯・ⅢA・甕A・甑、須恵器杯蓋・甕・壺、 志摩式製塩土器、土錘	
SK10025	土坑14	ℓ23 – m24	Ⅲ -2	土師器杯・皿・台付皿・甕・甑、ロクロ土師器皿、須恵器壺、灰釉陶器椀、山皿、志摩式製塩土器、土錘	
SK10026	土坑15	ℓ21 – m21	Ι ?	土師器甕	
SK10027	土坑16	ℓ23	Ⅱ -3 ?	土師器杯・甕、灰釉陶器椀	
SK10028	土坑17	ℓ21	Π?	土師器	
SK10029	土坑18	m23	Ⅲ -2	土師器皿・甕、ロクロ土師器	

第Ⅳ-2表 第160次調査 遺構一覧表

も出土していることから、埋没は鎌倉前期頃と考えられる。

S D 4355 調査区北東部で確認された溝で調査区外北側および東側へ伸びる。深さは1.2~1.4mを測り、断面より複数回の掘り直しが行われていた事が窺える。底部では先行するSD10020を確認している。土師器や須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器椀、白磁、青磁、山茶椀、常滑製甕、近世陶磁器類など多くの遺物が出土している。南伊勢系の土師器鍋(24)や近世陶磁器類も若干含まれており、この溝は中世~近世まで存続していたものと考えられる。

(新名 強)

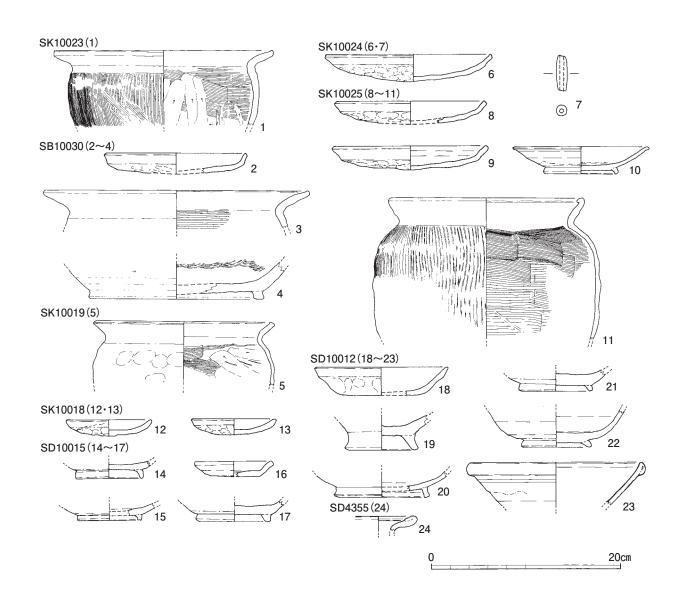
## 4 出土遺物

第160次調査では、一次整理の段階で整理箱43箱 分の遺物が出土している。土器類の他に志摩式製塩 土器が多数の遺構から出土している。ここでは、主 要な遺物のみ概述したい。

#### (1) Ⅱ期の遺物

S K 10023出土遺物 (1) 土師器杯・盤・甕、須 恵器椀・甕等が出土している。

土師器甕A (1) は、口縁部が大きく開き、胴部に対し口径が大きくなる。胴部内面は下半をヘラケズリする。 II - 1 期に相当する。



第Ⅳ-8図 第160次調査 遺物実測図

号 1 2 3 4	土師器土師器土師器	甕A ⅢA	SK10023	口径	00.0		_			_		番号
3 4	土師器				22.8	外面:ナデ、ハケ 内面:ナデ、ハケ後ヘラケズリ	密	良	外面:灰黄褐10YR5/2 内面:にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 2/12	外面にスス少量付着	003 - 04
4		refer a	SB10030	口径	14.6	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 1/12		004 - 05
	須恵器	甕A	SB10030	口径	27.6	外面:ナデ、 内面:ナデ、ハケ	密	良	にぶい橙 7.5YR7/4	口縁部 1/12		004 - 07
5		甕C	SB10030	底径	18.0	外面:ヘラケズリ 内面タタキ、ナデ 底部:貼付高台	密	良	灰白2.5Y7/1	高台部 3/12	底部磨滅・若干墨付 着、硯として転用	004 - 06
	土師器	甕A	SK10019	口径	18.2	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ハケ後工具ナデ	密	良	灰白7.5YR8/2	口縁部 2/12	外面にスス厚く付着	003 - 03
6	土師器	ШA	SK10024	口径 器高	18.3 2.9	口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ後ナ デ、内面ヨコナデ	密	良	橙5YR6/8	完形		003 - 05
7	土製品	土錘	SK10024	長幅	3.8 1.1	全面:ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	完形	重量5 g	003 – 06
8	土師器	ШA	SK10025	口径 残高		外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/6	口縁部 2/12	内面が一部剥離	004 - 03
9	土師器	ША	SK10025	口径 器高		外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	橙5YR6/8	口縁部 2/12		004 - 02
10	灰釉陶器	Ш	SK10025	口径 器高	13.9 3.9	体部ロクロナデ、底部糸切痕、高台部 ハリツケナデ	密	良	灰白2.5Y7/1	高台部 8/12	灰釉ツケガケ	004 - 04
11	土師器	甕 A	SK10025	口径	20.0	外面:ナデ、タテハケ 内面:ナデ、ヨコハケ	密	良	橙7.5YR7/6	口縁部 8/12		004-01
12	土師器	ШA	SK10018	口径	8.8	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	灰白10YR8/2	全体 5/12	外面に粘土接合痕・ 植物圧痕	003-02
13	土師器	ШA	SK10018	口径 器高		外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:ナデ	密	良	浅黄橙10YR8/4	完形		003-01
14	灰釉陶器	椀	SD10015	底径	6.7	外面: ナデ 内面: ナデ 底部: ケズリ、貼付高台	密	良	素地:灰白2.5Y7/1 釉:浅黄2.5Y7/3	底部 6/12	灰釉ツケガケ	001 - 09
15 1	緑釉陶器	椀	SD10015	底径	6.6	外面:ナデ 内面:ナデ 底部:貼付高台	密	良	素地:灰白5Y8/1 釉:抹茶色838	高台部 3/12	全面施釉	001 – 08
16	陶器	Ⅲ (山皿)	SD10015	口径 器高	8.0 1.6	外面: ナデ 内面: ナデ 底部: 糸切り痕	密	良	素地:灰白2.5Y7/1 釉:裏葉色855	全体 6/12		001 – 11
17	陶器	椀 (山茶椀)	SD10015	底径残高	7.4 2.2	外面:ナデ 内面:ナデ 底部:糸切り痕、貼付高台	密	良	灰白10YR7/1	高台 完形	内面磨滅 高台に籾殻痕	001 – 10
18	土師器	杯A	SD10012	口径 器高	13.8 3.0	外面:ナデ、オサエ後ナデ 内面:調整不明	密	良	浅黄橙10YR8/4	口縁部 3/12		001 - 03
19	ロクロ土師器	台付皿	SD10012	底径	7.0	外面:ナデ 内面:ナデ 底部:糸切り痕、貼付高台	密	良	浅黄橙10YR8/3	高台部 9/12		001 - 02
20 1	緑釉陶器	椀	SD10012	底径	9.2	外面:ナデ 内面:ナデ 底部:貼付高台	密	良	素地:灰白5Y7/1 釉:威光茶990	底部 3/12	全面施釉、高台磨滅 内面にトチン痕1ヶ 所あり	001 - 07
21	陶器	椀 (山茶椀)	SD10012	底径	7.1	外面:ナデ 内面:ナデ 底部:糸切り痕、貼付高台	密	良	灰白2.5Y7/1	高台部 11/12	内面磨滅、高台磨滅	001 – 04
22	陶器	椀 (山茶椀)	SD10012	底径	7.0	外面:ナデ 内面:ナデ 底部:糸切り痕、貼付高台	密	良	灰黄2.5Y7/2	底部 7/12	内面磨滅	001 – 05
23	白磁	椀	SD10012	口径	18.0	外面:ケズリ	密	良	素地:灰黄2.5Y7/2 釉:灰オリーブ5Y6/2	口縁部 2/12	内外面に施釉	001 – 06
24	土師器	鍋	SD4355	-	-	口縁部ヨコナデ	密	良	浅黄橙10YR8/3	小片	外面にスス付着	002 - 08

第Ⅳ-3表 第160次調査 遺物観察表

**SB10030出土遺物**  $(2 \sim 4)$  土師器皿・甕、須恵器甕、志摩式製塩土器等が出土している。

土師器皿A (2) は、口径14.6cm、器高2.1cmである。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、強くヨコナデする。甕A (3) は、口縁部が大きく開く。須恵器甕C (4) 高台が付き、胴部外面はロクロヘラケズリされる。内面に同心円状の当具痕が残る。II-2期に相当する。

SK10024出土遺物 (6・7) 土師器杯・皿・甕・ 甑、須恵器杯蓋・甕・壺、志摩式製塩土器・土錘等 が出土している。

土師器皿A(6)は断面形が孤状で、口縁端部が やや角張る。環状土錘(7)は、小型品で重量は5 gである。II-2期に相当する。

SK10019出土遺物(5) 土師器杯・甕・鍋、須恵器甕、志摩式製塩土器等が出土している。

土師器甕A(5)は、口縁端部外側に面をもつ。 灰白色を呈し、体部外面には指頭圧痕が残る。Ⅱ-2~3期に相当する。

#### (2) Ⅲ期の遺物

S K10025出土遺物(8~11) 土師器杯・皿・台付皿・甕・甑、ロクロ土師器皿、須恵器壺、灰釉陶器皿等の土器類のほか、志摩式製塩土器、土錘などⅢ-1期のものが出土している。

土師器皿A  $(8 \cdot 9)$  は、口縁部の約1/2をヨコナデする。甕A (11) は、やや寸胴な形態で、口縁部はあまり開かず、端部を内側に折り返す。

**SK10018出土遺物**(12・13) 土師器杯・皿・甕、 ロクロ土師器皿、須恵器甕、灰釉陶器椀等Ⅲ - 2~ 3期のものが出土している。

土師器小皿  $(12 \cdot 13)$  は、口縁部のヨコナデの範囲が (12) は約1/2、(13) は約1/3である。

#### (3) 鎌倉時代以降の遺物

S D10015出土遺物  $(14 \sim 17)$  S D10015は、土師器椀・甕、須恵器甕・壺、灰釉陶器椀、緑釉陶器椀、山茶椀・山皿等、II-4期から鎌倉時代前期までの遺物を包含する。

灰釉陶器椀(14)は、形の崩れた三日月状高台を もつ。緑釉陶器椀(15)は、全面に施釉される。

山皿(16)と山茶椀(17)は第5型式に相当する。

S D10012出土遺物 (18~23) 区画道路の東側溝

を踏襲する溝 S D10012からは、土師器杯・皿・台付皿・台付椀・高杯・甕・甑、須恵器杯・壺・甕、緑釉陶器椀、灰釉陶器椀、白磁椀、青磁椀、山茶椀等が出土している。Ⅱ - 1 ~ 2 期・Ⅲ期の土器が主体であるが、鎌倉時代の土器も含まれる。

土師器杯A (18) は口縁部の約1/3を強くヨコナデし、端部は尖り気味になる。ロクロ土師器台付皿 (19) は、高台部のみ残存する。緑釉陶器椀 (20) は底部のみ残存し、断面長方形の高台がつく。全面に施釉し、トチン痕が残る。

山茶椀(21・22)は底部のみ残存する。外に開く 高台をもち、22は高台形が小さく、丸みをもって口 縁部につながる。白磁椀(23)は、玉縁状口縁である。 S D 4355出土遺物(24) 埋没時期は中世から近世 と考えられる溝で、土師器杯・皿・台付皿・高杯・鉢・ 甕・鍋、ロクロ土師器皿、須恵器杯・椀・甕・壺、 志摩式製塩土器、緑釉陶器皿、灰釉陶器椀、白磁椀、 青磁、山茶椀・山皿、常滑製甕、近世陶磁器等が出 土している。

土師器鍋(24) は南伊勢系で、伊藤氏の南伊勢系 鍋編年<sup>(3)</sup> の第1段階に相当する。 (角正芳浩)

## 5 まとめ

第160次調査では、北辺道路南側溝および南北区 画道路の両側溝を踏襲する可能性のある溝、掘立柱 建物1棟を確認した。

#### (1) 北辺道路南側溝について

北辺道路南側溝を踏襲する溝については、SD 4355・10015・10020の3条を確認した。SD4355は第66・79次調査でも確認されており、奈良時代後期に掘削され、鎌倉時代に埋没したとされている。今回の調査では常滑製甕や南伊勢系の土師器鍋、近世陶器も出土している。この溝に沿って「前沖溝」と呼ばれる水路が現在も流れており、一部混じり込みの可能性もあるが、重複関係よりSD10012より後に埋没していることを考えると、SD4355の最終的な埋没年代は中世後期〜近世と考えたい。

SD10015はSD10020を再掘削したもので、出土 遺物より平安時代中期~鎌倉時代前期の溝と考えら れる。SD10020はSD10015の底部で確認されたこ とから、平安時代中期以前の溝であろう。この溝は 調査区北東部のSD4355底部でも確認されており、 更に東へ続いている。方位は、第160次調査区内で 確認された範囲であるが、E2~3°Nである。埋 土の色調などから、方格地割造営当初までさかのぼ るものとは断定できないが、直線的で整然とした掘 形から、造営当初の形状をかなり強く反映している ものと考えられる。

方格地割北辺区画の規模については、前述したように、東加座北①区画以西では、区画内の南北幅が410小尺ほどであるのに対し、東加座北②区画では400小尺であるという齟齬が指摘されている。北辺道路南側溝をSD10020、東加座北①区画の南側の区画道路北側溝を第150次調査で確認されているSD1940とすると、両側溝間の距離は約400小尺となる。SD10020・10015・4355からは、方格地割造営期や平安前期の遺物は含まれておらず、これらを遡る遺構の痕跡も確認されなかったことから、少なくともこの区画では方格地割造営当初の溝はさらに北側に掘られていた可能性も考えたい。明確な遺構を確認していないので断定はできないが、そうなると、東加座北②区画においても区画内の南北幅は410小尺であった可能性も考えられる。

#### (2) 南北区画道路について

南北区画道路の側溝を踏襲する溝については、 西側溝SD3705と東側溝SD10012が確認されている。西側溝は再掘削が認められるものの、幅が0.8 m程と狭く、埋土も黒褐色であったことから、第 57・150次調査での状況からも方格地割造営時に近 い溝である可能性が高い。一方、東側溝は、何度か 掘り直した痕跡が認められ、最終埋没する鎌倉時代には、幅2.5m程の溝であったことが窺える。第57次調査でも道路東側には3~4条の溝が確認されていることからも、東側溝は再三掘り直しが行われていたのであろう。

また、道路側溝の外側には、今年度の第158次調査区同様、多数のピット群が検出された。ピット群は規則性がなく、形状や大きさも様々であることから、第158次調査で確認されたものと同様に、道路に沿って植栽された植物痕跡と考えられる。

#### (3) 掘立柱建物について

SB10030は1間以上×2間の東西棟で、II-2期に属する建物である。SD3705・10020とは7m前後離れており、区画道路と建物の間にはある程度の空間を空けていたのであろう。また、建物を囲むようにSK10028・10026・10023・10024・10027が存在する。これらは、いずれもII期の遺構であり、SD10030に関係する遺構の可能性も考えられる。

(新名 強)

#### 【註】

- (1)大川勝宏「斎宮方格地割に関する二·三の試論」『斎 宮歴史博物館研究紀要』第十七号、斎宮歴史博物 館、2008
- (2) 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』 第3号、三重県埋蔵文化財センター、1994
- (3) 伊藤裕偉「中世南伊勢系土師器に関する一試論」 『Mie history』vol. 1、三重歴史文化研究会、 1990

写真図版IV-1 第160次遺構(1)

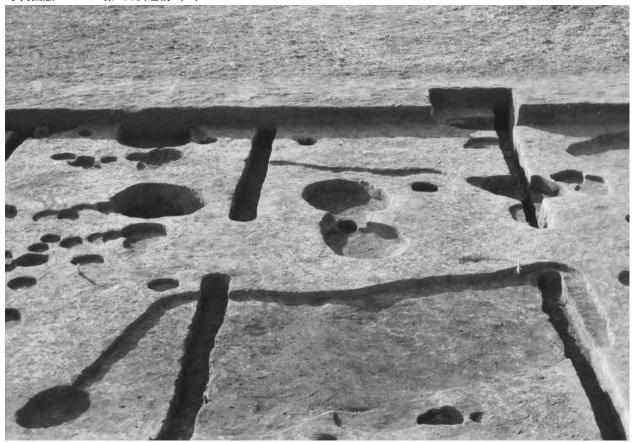


調査区全景(西から)



調査区全景(北から)

写真図版Ⅳ-2 第160次遺構(2)

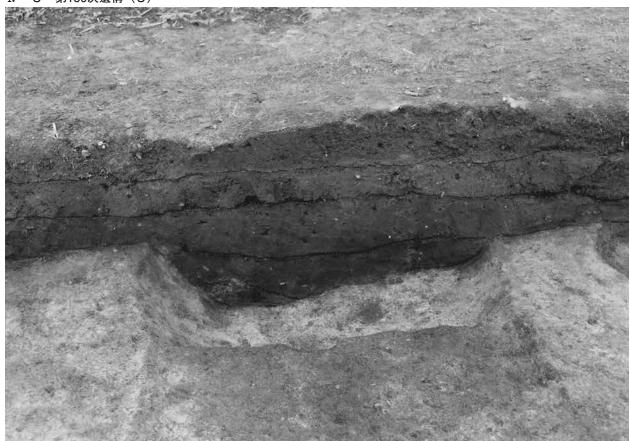


S B 10030(東から)



S D 3705・10012(南から)

№-3 第160次遺構(3)



SD3705(北から)



S D4355・10012(東から)

写真図版Ⅳ-4 第160次遺構(4)・遺物



S D 10015・10020(東から)



# V 保存処理

斎宮跡第157次調査区北東部の包含層上層から出土した金属製品で、平面長方形の立方体である。表面には鍵穴状の穴や透かしがあり、4箇所の鋲留めが確認できた。金属製品であり、劣化の危険性もあったことから、平成20年度に保存処理および科学分析を(財)元興寺文化財研究所に委託した。

以下、元興寺文化財研究所の報告による。

(新名 強)

## 1 分析対象

斎宮跡第157次調査出土金属製品1点

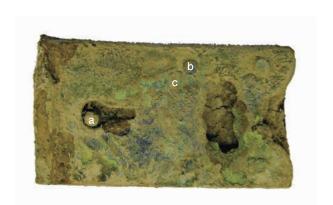


写真 V-1 第157次調査出土金属製品 分析位置

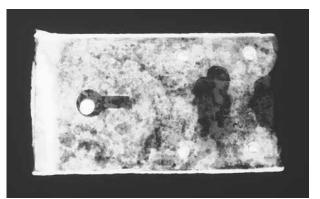


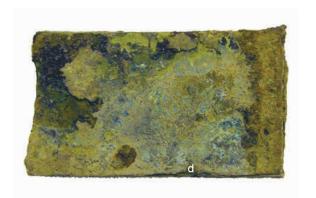
写真 V-2 第157次調査出土金属製品 レントゲン写真

## 2 分析内容

蛍光X線分析装置により材質分析を行った(第V-1図の分析箇所a~d)。



写真 V-3 分析箇所 d (金色部分) 拡大写真





Z	元素	元素名	ライン	a(cps)	b(cps)	c (cps)	d(cps)*	ROI(keV)
22	Ti	チタン	Κα	10.62	3.856	5.589	_	4.35-4.66
26	Fe	鉄	Κα	208.54	49.375	98.807	5.229	6.23-6.57
29	Cu	銅	Κα	2211.612	2405.714	2490.558	342.414	7.86-8.22
30	Zn	亜鉛	Κα	288.787	120.077	284.49	135.078	8.45-8.82
33	As	ヒ素	Κβ	_	_	_	0.279	11.52-11.93
50	Sn	スズ	Κα	12.452	_	9.821	6.958	24.92-25.47
82	Pb	鉛	Lβ	53.783	7.679	16.761	2.234	12.42-12.84

註:単位[cps]で表される値はそれぞれの元素の検出強度であり、定量値ではない。

※測定箇所a、b、cの測定条件は管電圧45kV、コリメータ径 $\phi$ 1.8mmにより300秒間、分析箇所dの測定条件は管電圧50kV、コリメータ径 $\phi$ 0.1mmにより1000秒間とした。

第V-1表 第160次調査 検出元素一覧表

## 3 使用機器と測定条件

エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 (XRF) (SII ナノテクノロジー SEA5230)

試料の微小領域にX線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光X線を検出することにより元素を同定する。

測定は大気中で45kVの管電圧、コリメータ径 $\phi$  1.8mmにより300秒間、または、50kVの管電圧、コリメータ径 $\phi$  0.1mmにより1000秒間行った。なお、X線管球はモリブデン(Mo)である。

#### 4 結果

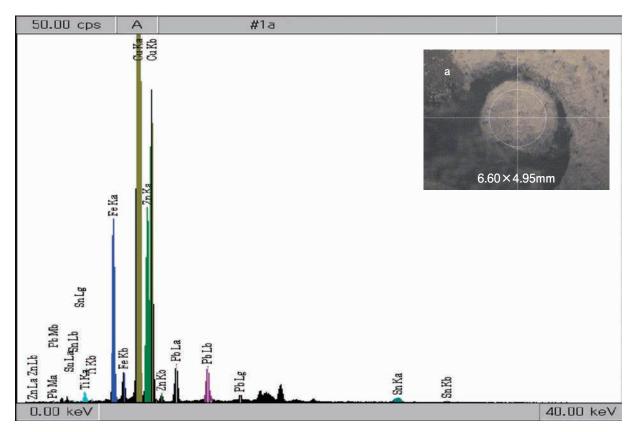
各分析箇所のXRF分析による検出元素一覧を第 V-1表に示した。

## 5 考察

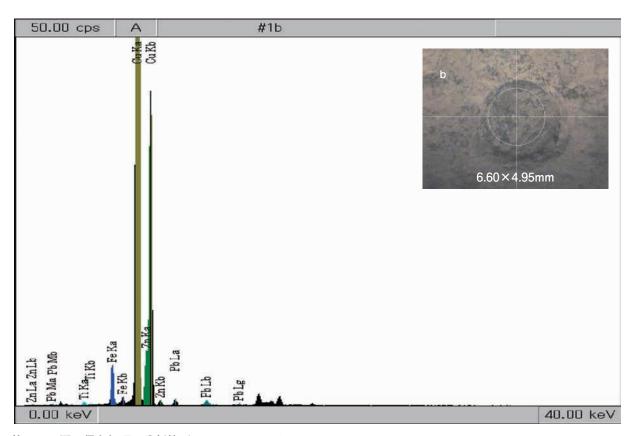
- 各分析箇所からは、併せて銅(Cu)、亜鉛(Zn)、
   ヒ素(As)、スズ(Sn)、鉛(Pb)の5元素を検出した。なお、同時に検出したチタン(Ti)、鉄(Fe)は土壌成分などの外部環境由来と考えられる(第V-3~6図)。
- ・ 遺物表面に僅かに存在する金色部分d(第V-2図)から銅、亜鉛、ヒ素、スズ、鉛を検出した(第V-6図、大気中で管電圧50kV、コリメータ径  $\phi$ 0.1mmにより1000秒間測定)。このうち、他の分析箇所に比べて亜鉛を強く検出した。

- 鍵穴状部分の円形物体aと地の部分cからは、銅、 亜鉛、スズ、鉛を(第V-3図、第V-5図)、 鋲部分bからは銅、亜鉛、鉛を(第V-4図)検 出した(大気中で管電圧45kV、コリメータ径φ 1.8mmにより300秒間測定)。
- ・ 以上のことから、この金属製品は黄銅(真鍮) 製であると考えられる。

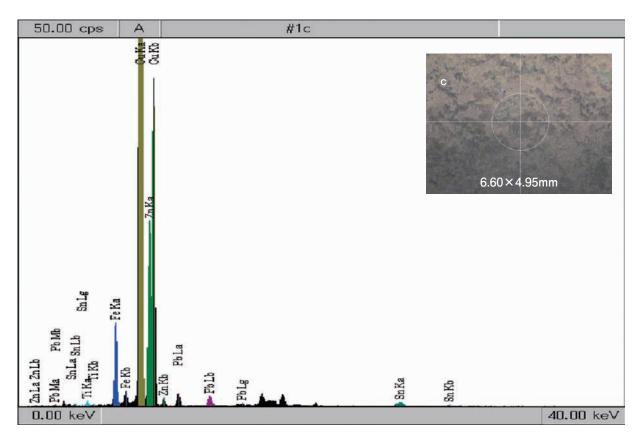
(元興寺文化財研究所 川本耕三)



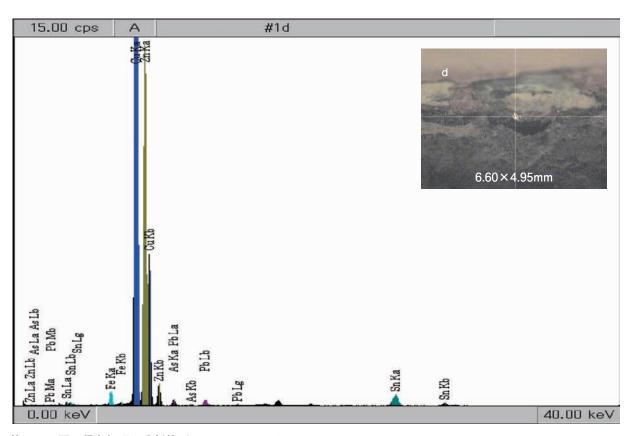
第V-1図 保存処理 分析箇所aのXRFスペクトル



第V-2図 保存処理 分析箇所 bのXRFスペクトル



第V-3図 保存処理 分析箇所 cのXRFスペクトル



第V−4図 保存処理 分析箇所 dのXRFスペクトル

# 報告 書抄録

ふりがな	しせきさいく	うあと ~	へいせいに	じゅうね	んどはっ	っくつちょう	さがいほう					
書 名	史跡斎宮跡	平成20年度	度発掘調査	概報								
副書名												
巻次												
シリーズ名												
シリーズ番号												
編著者名	<b>倉田直純・新名強・角正芳浩</b>											
編集機関	斎宮歴史博物:	斎宮歴史博物館										
所 在 地	〒515-0325 ∃	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL0596-52-7027										
発行年月日	西暦 2010年	3月26日		ı	,		1					
ふりがな	ふりがな	J -		北 緯	東経。,,,,,	調査期間	調査面積	調査原因				
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				m²					
斎 宮 跡	多気郡明和町 斎宮・竹川	24442	210	34° 31′ 55″ ~ 34° 32′ 30″	136° 36′ 16″ ~ 136° 37′ 37″	20080526 ~ 20090227	1,280㎡ (第157次) 525㎡ (第158次) 602㎡ (第160次)	学術調査				
第157次調査 (柳原地区)	官衙		平安以降	l	主建物・溝	須恵器 灰釉陶器 志摩式勢 白色	製塩土器	柳原区画 北西部の 堀立柱建物群				
第158次調査(御館地区)	官衙		平安以降	奈良 区画	主建物 古道 道路 · 溝	須恵器 灰釉陶器 貿易	奈良古道 区画道路 西側溝					
第160次調查 (東加座地区)	官衙	奈良 鎌倉	平安以降	区画	主建物 道路 ・溝	須恵器 灰釉陶器	土師器 貿易陶磁	北辺道路 南側溝 区画道路				
要約	第157次調査では、平安時代斎宮跡の方格地割中枢部にあたる柳原地区北西部の調査を 行い、掘立柱建物16棟を確認した。調査区北西隅では、区画端であっても掘立柱建物が配 置されていることが判明した。第158次調査では、御館地区を調査し、古代伊勢道および											

# 史跡 斎宮跡

平成20年度

# 発掘調査概報

2010年3月26日

編集·発行 斎宮歴史博物館

印刷 文化印刷有限会社